29
146

東西名婦の面影

明治女流の名星

寫眞、書畫入

印刷中

此書は明治の世に宵の名星の如くに光る女流數十人の傳記、逸事、性情、嗜好等を集めたるものにして一讀せば是等の女流と對面交際するが如き感あらん其人々は

婦人貴族　婦人實業家　婦人財政家

婦人教育家　家庭整理の賢婦人

女豪傑　政事家の夫人

等にして加ふるに其人々の寫眞及び眞筆の書畫あり

東西名婦の面影

東京

開拓社發行

はしがき

人の性質は其懐くところの理想によりて作らるゝものなり、而して理想は古今の歴史に現はれたる最と高く最と美しき人の行を嘆美するより來る。

『東西名婦の面影』は、和漢西洋賢婦名女の傳を綴りて、明治の少女達をして是等の人々の面影を見せしめんと欲するに外ならず、少女達若し枕頭坐邊の百人一首に代へて之を讀誦せば、品格自から備はり、性情自から高く、益する所尠からざるべし。

明治三十三年五月　　開拓社

東西名婦の面影目次

神功皇后……一
格言――スチユワート、ミル。コレリッヂ……二
俳句――千代……三
孟子の母……三
格言――上杉治憲……四
エリザベス女皇……五
格言――松平樂翁……六
辨内内……七
○ローラン夫人……九
格言――ラスキン。レッキー……一一
齊姜……一二
橘の妙……一三

格言——チトコムブ……一五
宿痼女……一六
格言——貝原益軒……一七
○ヨセフヰン皇后……一八
玉瀾……二〇
○フライ夫人……二三
格言——セヂカ。ハックスレー。言志錄……二三—五
樊姫……二五
山名氏清の妻……二六
格言——カール、サウベストル……二九
芒慈母……三〇
格言——箴言。マツニー……三一—二
○ワシントンの母……三三
格言—フランクリン。シセロ。ベーコン。クーパー。俳句……三三—四

武田勝頼の妻……三四
コロンバスの妻……三六
格言——烏丸光廣……三七
子發の母……三八
菊地寂阿の妻……三九
格言——最奮印度法律書。スマイルス……四二
楚野の辯女……四三
格言——中江藤樹……四三
イサベラ皇后……四四
格言——ヴオルテール。シエークスピヤ。キリスト……四五—六
清少納言……四六
ハンナ、モーア……四七
格言——西行法師。北窓鎖談。レッドヤルド……四八—九
田稷の母……四九

紫式部……五〇
格言——マダム、グランドフォルト。ウヰラード女史。リットン……五一—二
曹大家……五三
格言——ビーチヤー。リンコルン……五三—四
マリヤ、テレサ女皇……五四
格言——スマイルス。ベーコン……五五—六
矢部正子……五六
格言——畜德錄。言志錄……五九—六〇
蔡人の妻……六〇
格言——インテレクチユアル、オブ、サーバー。アビー。……六一
俳句——かさし……六二
小式部内侍……六三
格言——ド、トクヴイル。和歌——榮仁親王……六三—四

サフフオ……六四
格言——時子。泉式部。ナポレオン……六五—六
光明皇后……六六
格言——バックル。マクドナルド。ガリバルヂー……六七
俳句——絞戸……六八
鄧皇后……六八
格言——ムーア。ブラウニング。ラスキン……六九—七〇
上毛野形名の妻……七〇
格言——坂本龍馬。ド、オルレアン。シドニー、スミス……七一—二
ダイオチマ……七三
格言——シエークスピヤ。ポープ。サフカレイ……七三—四
法均尼……七四
格言——フランクリン。ロングフエロー。チツキ……七五
樂羊子の妻……七六

格言——梅園叢書。佐藤一齋……七七
有智子内親王……七八
格言——ナポレオン。マダム、ギラルデ井ン……七八—九
コルネリア……八〇
格言——ヘルデルソン。スマイルス。俳句——りん……八〇—一
衣縫女……八二
格言——上杉鷹山。俳句——……八三
衛鯉公夫人……八四
格言——マダム、アガウド。マダム、デッファンド……八五
俳句——羽紅……八六
福依寶……八六
格言——ウ井ルソン……八七
モニカ……八八
格言——ブライス……八九

赤染衛門……九〇
格言——白川樂翁。勝海舟……九一—二
衛姫……九二
格言——レッキー。フレーベル……九三—四
格女女……九四
格言——ラムエル王の詩……九五
ジャン、ダーク……九六
格言——女大學。女小學……九七—八
土肥實平の妻……九八
格言——ショウペンハウエル。リチヤード。ガーフ井ール
ド夫人……九九—一〇〇
弓工の妻……一〇〇
格言——ベンタム。ボルク。ナポレオン……一〇一—二
白拍子……一〇三

格言——森有禮……一〇四
メイソテノソ夫人……一〇五
格言——曹大家。ブラックウード雑誌。スペクテートル雑誌……一〇六—七
白河の捨……一〇七
格言——シモソ。ベーコン……一〇八—九
晏子御者の妻……一〇九
一休和尚道歌……一一〇
尼將軍……一一一
格言——パックル。ウエスレー……一一二—三
ルーテルの母……一一三
格言——ムウレソ。マーテソ。ヘルプス……一一四—五
松下禪尼……一一五
格言——ベーコソ。和歌——千家尊福。格言——孟子。四諺……一一六—七

超括の母……一一七
格言——バイロソ。俳句——ばせを……一一八—九
楠正行の母……一一九
格言——フェチロソ。フード……一二〇—一
シャーロット、コルデー……一二一
格言——幸子。おあん物語……一二二—三
瓜生保の母……一二四
格言——スミス孃。ハックスレー。ヴウエラ……一二四—五
呂后……一二六
格言——細井平州……一二六
津田八彌の妻……一二八
格言——サウスベリー。ローラン夫人。沙翁……一二九—三〇
ナポレオソの母……一三〇
格言——烏丸光廣……一三一

大政所……一三三
格言——中村暢齊……一三三
寡孝婦……一三四
格言——セイインクス。アイキン……一三五—六
木村重成の妻……一三六
格言——エヂソン。ブレーク……一三七—八
ステール夫人……一三八
山内一豊の妻……一三九
格言——土曜日評論。スペンサー。タムソン……一四〇—一
陶侃の母……一四一
格言——ウエストミンステル評論。マシヨン……一四二—三
細川忠興の妻……一四三
格言——淮南子。孝子。曹子建。漢書。王蠋。和歌……一四四—五
ルイザ皇后……一四五

格言——晉書。鬼谷子。管子。趙瓦……一四六—七
阿萬の方……一四七
格言——雲萍雜誌……一四八
趙元楷の妻……一四九
格言——ステール夫人。ミユーロック女史。ナポレオン。ユーゴー……一五〇—一
春日局……一五一
格言——レイノルド。ムーディ。シドニースミス。ラスキン……一五二—三
ペスタロヂの妻……一五三
格言——ウヰツス……一五四
原元辰の母……一五五
格言——白川樂翁。俳句……一五六—七
二難……一五七

格言——ブラウニング夫人。ヘーア……一五八
和歌——御名部皇女……一五九
淺岡の局……一五九
格言——熊澤蕃山。一齊……一六〇—一
チヤーロット、ブロンテ……一六一
格言——チエスターフイルド伯爵。インテレクチユアル、オ
ア、サーバー。ペスタロチー……一六二—三
加賀千代……一六三
格言——バックレー。ピーコンスフイールド卿。家康……一六四—五
則天武后……一六五
格言——上杉鷹山……一六六
成田氏の母……一六七
格言——一條兼良。古歌……一六八—九
阿都麻……一六九
ヂヨーヂ、エリオット……一七三
格言——グラッドストーン。ブライト……一七三
瀧鶴臺の妻……一七四
西藤集……一七五
楊氏烈婦……一七六
格言——聖オーガスチン……一七七
ファオーセット夫人……一七八
忠五郎の妻……一七八
二程の母……一八〇
格言——梅園環齋。和歌——中院通躬卿……一八一—二
千代能姫……一八二
ブラウニング夫人……一八三
七兵衛の妻……一八四
詹氏の女……一八五

格言——エマルソン。ミルトン。フヒリップス。ブルークス……一八六
俳句——ばせを……一八七
プロクトル……一八七
三輪女……一八八
陳堂前……一八九
格言——耶津楚村。和論語。維子。穴穂部の皇女……一九〇—一
シエーン、イングエロー……一九一
源三郎の妻……一九二
格言——白川樂翁。ショーチ、マクドナルド。リンコルン……一九三—四
謝枋得の妻……一九四
格言——ゲーテ。ベーコン……一九五—六
ソマーヴイル夫人……一九六
格言——ベンタム。フレーベル。ニウマン……一九七—八

山口ふじ……一九八
格言——女四書。武田信玄。菅原道實。荀子……一九九—二〇〇
盧穿の妻……二〇〇
格言——シエリダン。ラボラエ。シヤルトリアン。グレス
リー……二〇一—二
エンマ、ウイラード……二〇二
加茂眞淵の妻……二〇三
格言——顧體集……二〇三
南京の食婦……二〇四
格言——ボール、モール、ガゼット。ジエームス、ブライス。
エルネ、レコベ……二〇五
ブラックウエル……二〇六—七
長橋村岡……二〇七
格言——フイツチ。スミス。和歌——日蓮……二〇八
……二〇九—一〇

西太后……二一〇
格言——上杉鷹山。大宰春台。和歌——その女……二一一—二
ラエンニー、リンド……二一二
格言——ナポレオン。ゲーテ。ラベター。ハリベートン。ウェブスター。ソクラテス……二一三—四
お石……二一四
格言——本多佐渡守……二一五
メンド、ライラン……二一六
格言——家康。益軒。程明道。楠正成。韓愈……二一七
和歌——礬謝女子……二一八
はつ女……二一八
格言——上杉鷹山……二一九
ストオ夫人……二二一
古諺集……二二一—二
井上傳女……二二三

格言——ヘリオドラス。司馬温公。和歌——一茶……二二三—四
ローザ、ボンハア……二二五
個諺集……二二六
蓮月尼……二二七
格言——紀德民。希臘古諺。羅馬古諺……二二八
ナイチンゲール……二二九
格言——ゼロセフ、クック。ユーゴー。ェヂソン……二三〇
吉田松蔭の母……二三一
格言——源空上人。サイラス。西郷南洲。佐久間象山。和歌——
——海月……二三二
フランシス、ウイラード……二三三
格言——アルガー。ゲイ。ド、アルフェー。サイラス。バッフオン……二三四
稅所敦子……二三五
俗諺集……二三五—六

挿繪

ヴイクトリア女皇……三三六
慈悲の叶……三七—八

挿繪

舞内侍……八
ローラン夫人……一〇
橘の妙……一四
ウロセフマン皇后……一九
玉鬘……二一
フライ夫人……二四
山名氏清の妻……二七
武田勝頼の妻……三五
菊地寂阿の妻……四一
矢部正子……五八
東西名婦の面影目次終

東西名婦の面影

開拓社編纂

神功皇后の英雄男の女王におはせしとは、皆人の知るが如し。仲哀天皇の后として、政を輔佐し奉れり。共に熊襲の逆を征せんが為に、遠く海外に征旗を翻すや、既に帝かくれさせ給ひし後は、自から天下に臨んで、胎中の天子を擁して、大臣武内宿禰と共に、三韓を征服し、大に國威を伸張したまひ、英名、漢土の史籍にさへ傳はりたまふ、蓋し皇后の聰明なる、深く心を外交に用ゐ玉ひて、たゞに三韓のみならず、遠く漢土と交を通じ玉ひしと覺ゆ。

女子が男子に屈從すといへる現今の男女の關係は、啻に其事の既に不善なるのみならず、尙ほ人類の改進に對して、大なる妨害を爲すものゝ一となるべし。（スチユアート、ミル）

＊　＊　＊　＊　＊

多數の婦女子は一の特性を有せずと述べたるポープの論は、或は嘲笑の語ならん。然るにポープよりも更に男女の性を知りたる沙翁また特別の性質なきを以て、女の完全したるものとなすが如し。大抵の男は、皆な彼のデスデモナ若くはオフェリヤの類を妻となさんことを欲するならん。此類の女は、必ずしも夫君の心術を了解せず。然れども能く夫君と感を同ふするを得るならん。（コレリッヂ）

＊　＊　＊　＊　＊

孟子の母

大賢孟子、幼にして父を喪ひ、母と共に居れり。初、墓側に住居せしに、孟子葬式の眞似をなすを以て、母更に居を市場の傍に遷せしに、孟子此度はまた商人の眞似を遊べり。よりて三度目に學舍の傍に移りしに、此度は、講學の眞似をなせり。よりて此處舍るべしとなして。孟子を養育するに力を用ゐき。これをば孟母三遷の教とぞいふ。孟子長じて他に遊學し、學半にして家に還りしが、母即ち織りかけの布を斷ちて、學業を中途に廢すれば、此斷布の如くに多くの用に當らず、丁稚斷僕に了るべしと誡めければ、孟子實にもと曉り、再勵學に勉め、遂に彼大名を成せり。

それ女は他門へ嫁し、他の人を父母とし、他の人を夫とし、他の親戚を親戚とすること和漢古今まつは婦女の通例なり。他門のことなれば其の家風も熟知せず、見ず知らずの人を舅姑夫、親戚となせることとなれば、之に事へて其心に叶はんこと、容易に心を用ゐては、事へ得べく處し得べきことにはあらぬなり。扨孝順貞節といふ仕方箇條も樣々あることにて、聖賢の敎へより先哲の格言追ひ〳〵見習ひ聞き習はれたるが如く、拙き筆には著すべきにも及ばぬことなり。其の聖賢の敎戒、先哲の格言といへども、目に見、耳に聞きたるのみにて、是れを心に留めず、身に修し行はざれば用には立たざるなり。身に修し行ふといふとも、今視、今聽きて其儘行ひ得らるゝものにはあらず、日を積み年を重ねて、朝夕に心を放たず修行するになくては。我が物になし得ぬ時は物眞似といふになりて、感通せざるなり。（上杉治憲）

エリサベス女皇

エリサベス女皇は、啻に英國のみならず、歐洲古今の英主の一人なりき。其德は稱するに足らざるものありしかど、其才識非凡にして、賢人を擧げて、國政に任じて紀綱を張り或はスコットランド及アイルランドを統一して、今日の英國を成し、或は西班牙と戰ふて、其大艦隊を碎破して、これより英國は海上の大勢力となり、或は廣大なる殖民地を西大陸に開きて、領土を擴め、かく國威を列邦に耀かしたり、また此時代に於ては夥多の大文學者輩出して、文藝大に進歩し、また百般の事物盛に發達し、國民は太平の澤に浴し、英國の

歴史に華を咲かせたり。

女の行ひの中にも嫉妬の心ほど悪しきことはあらじ。我れのみ貴からん、我れのみ寵せられん、我れのみよからん、高からんとて、皆人をけおとし、少しも我れに並ぶものは、いかにも憎く思ふ、こは我れのみよからんと思ふ故なり。此の心のあさましく歎かしきは譬ふべきものには侍らずなん。

『はづかしき女の心の中』と言ひたる如く、其言ふ事、爲す事、腹立つ事、悦ぶことも皆我が身の好からん、人悪しかれと思ふより起こり侍るは、流石に男の方にては皆知りわたりて、いかにも浅ましく、歎かしと思へども、もと女の事なればとて少しは打ち宥め、慰め、道理のはし長閑に言ひ聞かせ侍りても、心暗ければ其

理りも分き侍らず、いよ〳〵其悪しき心増長して、慎む心うせはて、遂には男に飽かれて捨てられ侍る聞いと多くぞあんなる。

（松平樂翁）

辨内侍

辨内侍は、吉野行宮の宮女なりしが、高師直の爲に奪はれんとし武士共の爲に圍まれたる處に楠正行圖らず來り合せて之を救ひ御所に返したるに、帝感感あり、内侍をば正行が宿の妻にせよとて賜ひけるに、正行は『とても世になからふべくもあらぬ身のかりのちぎりをいかで結ばん』と一首の歌を詠じて之を辭したれども、内侍は、一旦君の許しを得たる夫の事なれば、正行四條畷にて戰死の後は、己れも髪を断ちて尼となり、大和の龍門の庵室を結びて、一生後醍

辨内侍

醐帝の菩提を吊ひ、正行の跡を追福して終へたりとぞ。

秋風にそよぎ出たる萩の屋

をのづからなる法のことわり　辨内侍

ローラン夫人

佛國革命の花とし呼ばれたるローラン夫人は一彫刻師の娘なりしが幼より自由民權を慕ひ、佛國貴族の壓制に憤り、夫ローランに嫁して貞操を盡すの傍、國事に奔走し、温和的改革黨を組織して、夫ローランを首領たらしめ、かくて穏に佛國革命を成就せんとしたりき。然るに當時過激なる革命黨は、國王を捕へて國賊となし、之を斬首に處せんとせる際、夫人は力を竭くして其不可なるを爭ひしが爲に、革命の敵と目せられ、捕はれて牢獄に投ぜられ、後三十九歳

ロラン夫人

を以て斷頭臺の露と消えたり。刑に臨み叫んで曰く『ア、自由よ汝の名によりて如何に多くの罪惡の行はるゝかな』と。

婦女子もし之を望まば、容易に戰爭を中止するを得べし。何んとなれば凡て戰爭として婦女子の關係せざるなく、又其好むがために起らざるはなきが故なり。（ラスキン）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

男子には美術上の力を非常に具備するもの、往々にして之れあり。然れども總体より之れを評する時は、此力なきものを多しとす。之れに反し女子には、美術上非常の力を具備するは稀れなり。然れども總体より之を評するときは、何人も大抵皆な此力を有するが如し。（コレリッチユ）

＊　＊　＊　＊　＊

警察上の統計によるに、男子の罪を犯すは、女子よりも多きこと五倍なり。故に徳義上女性が男子に立優れることは、眞に明白至極の事實なり。（レッキー）

齊姜

齊姜は晉文公の夫人なり。文公はじめ重耳と云ひて、本國の亂を逃れて齊に在りし時娶れり。重耳齊國の平和なる生涯に馴れて、本國に歸りて、亂を靜めんとするの意なかりし時、齊姜父、桓公の重耳を助けて晉國に還さんとするの計を洩れ聞き、重耳に歸國を勸めけれども、可かず。よりて、意を決して、臣下と謀り、重耳に酒を侑めて、甚だしく醉はしめ、前後不覺なるに乘じて、車に載せて、本國に送りたるが、重耳其途にて醒めて、大に怒り妻の處置を憤りつゝ、諸國を過ぎて本國に入る途にて秦の扶を得て歸りしに、人民みな歸服して、國自から治まり遂に霸王となる。

橘の妙

妙は橘逸勢の女。承和九年父謀叛の罪わりて伊豆の國に配流せらるゝに及び、女悲歎禁ずる能はず、徒步父に從つて配處に赴かんとせしに、許されず。よりて、即ち晝は伏して隱れ、夜は行きて父の跡を慕ひ行けり。然るに逸勢は途中病を獲て死せしかば、大に悲み、自から、其遺骸を埋めて、己は髮を薙りて尼となり、妙中と名づけ墓側に奉事すること十年の後、孝志聞に達し、父の靈を歸洛せしめ贈位の沙汰あり、よりて尼は、父の屍を柩に納め、自から之を負ひ

て、京師に還り、厚く、之を改葬したりとなん。

妙の橋

愛情の最も濃やかなる女子は、其思ひを凝らすこと又甚だ強大なり。されば一旦思ひ初めて、或る男子と偕老の契約をなしたらんのちは、滿腔の愛情悉く郎が上に集り、視る所のもの、聽く所のもの、風景音樂鳥の聲虫の鳴く音何れも郎を思はしむるの媒とならざるはなし。斯て指を屈して佳婚の當日を待つに當り、不幸にして其契約何かの事情によりて破れたらんには、譬へば白骨坐禪の僧が念凝したる頭上の一執念突如として茲に飛び出したるが如し。之れより心氣漠々有るが如く無きが如く、現の如く夢の如く、人世の苦樂殆んど一身の外に存するが如く思はるゝものなり。女性の執着し易き念情にして、一たび此の絶望の經驗を過ぐ

れば、之れよりして更に緣事を思ふの勇なく、況んや之を口にするの念あるなく、常に怏々として樂まず、青たらしき顏色に空しく殘生を送るに至るものなり。（チトコムブ）

宿瘤女

齊閔王出遊して東郭に到りしに、百姓皆其行列を拜觀せるに、一人の婦依然として、桑を摘みつゝ其手を休めず、王の行儀を意とせず。王之を怪みて招き寄よれば、其婦は頸に大瘤ある醜婦なり。何故に人に異り行列に目を留めざるぞと問へば答へて、父母はたゝ桑を摘めよと命じたれども、王の行列を見よとは云はざりし故なりといひ、其語一々理を弱め、まことにこれ賢女なりければ、王宮に歸りて後、盛に結納を贈りて、此宿瘤女を宮中に迎へ、終に立てゝ

后となしたり。宿瘤王を助けて內政を理して、爲に齊國の德化都國に及び諸侯之に朝するに至れり。女死して後閔王燕に滅さる。

言を出すに、其言さわがしからず穩なるは、其心のやしなひあるなり、もし言を出すに、さわがしく險しきは、心のやしなひなしと知るべし。

言を出すにも、わが身にかへりみて、分に過ぎたることをいふべからず、分に過ぎたることを言へば、人にそしり笑はる、耻づべし。又人に聞きて信ずべからざる事は、實事なりとも言ふべからず。

およそ人の忌み嫌ふ事は言ふべからず、人の生れつき不具かたわなる者あり、又其行、さきに大なる過ありしものあり、或は親先

徂いやしかりしものあり、此類言ひいたせば、聞く人嫌ひて怨み怒る、是れ世俗の所謂さしあひなり。心を用ひて言ふべからず。人を誉めそしること、つゝしみて過不及なかるべし。人の悪を大那にいひなし、小過を大過に言ひなすは讒言なり。又さほどなき事を誉め過ごすも、正直の道にあらず、一つひらて其人に私するなり。（貝原益軒）

ジヨセフィン皇后

ナポレオンはジヨセフィンの才徳高尚なるに敬服して、之を娶り、後彼は皇帝となり、此は皇后となり、共に天下に君臨して、皇后よく内廷を治め、臣下を撫したりしが、ナポレオン、後に至りて、政略上の野心に駆られて、ジヨセフィン皇后を離縁して、墺太利の皇女

ジヨセフイン皇后

ルイザを娶りしも、ジョセフィン毫も恨みず、なほ當時の帝の恩愛を忘るゝ能はざりき。後ナポレオン、失敗して、エルバ島に流さるゝや、新皇后ルイザは、直に逃れて、生家に歸りし程なるに、ジョセフィンは、當夫の身を絶えず配慮し、屢々奇を贈りて之を慰めたり。其後幾も無くして、死せしが、死に臨んで、なほナポレオンを追慕せしとぞ。

玉瀾

玉瀾は京都の祇園囃百合子の女にして名を町子と云ふ、池大雅の妻なり、大雅は秀でゝ諸藝に達しけるが、町子も亦之に劣らず、就中畫をよくしたりければ、大和の柳里恭より玉瀾の雅號を贈られぬ、或時歌の事にて、夫と共に堂上方へ參れるに、御内の女房達、玉瀾

玉瀾

てふ名のすぐれて美しければ、其人の如何ばかり麗しかるらんとて今や〳〵と待ち居たるに、思の外なる木綿布子の糊硬なるを纏ひ、手に肴籠提げつゝ、いと鄙びたる姿なりしかば、聞しに似合ざると共に、顔を合ひしと云ふ、彼女平生の嗜み閑雅にて、夫三絃を彈ずる時は、筑紫琴もて之に和し、實に琴瑟の調べよく諧ひて、諸共に風雅の生涯を楽み合ひぬ、詠み出でたる歌多き中にも、「松樹千年緑」と題したるは、孫の外にめでたし。

フライ夫人

歐米に於ける慈善事業の發達進歩は、實に十九世紀の賜なるが、其進歩偶然に非ず、慈愛仁義の士女實に之をなす。種々の慈善事業の興起したるが中に、フライ夫人の監獄改良の如きは、賊に傳ふべ

フライ夫人

しとなす。夫人は英國クエカー教徒の一人にして、倫敦銀行家の妻なりき。當時英國の監獄は不整頓を極め、罪囚の病を受けて斃死する者多し。殊に女囚監の如き亂雜、甚だしかりき。夫人が慈善の心之を見るに忍びず、身を擲して、これを改良せんとを計り、又自から獄内につきて、罪人の良友となりき。其結果遂に有名なるニューゲート獄の改良となり。フライ夫人の仁名世に傳ふ。

誰か天然は女性の才能を遇すると親切ならずといひ、又彼等の德性は墮落したりといふを得んや。予は信ず、女子も男子と同じく、活動力にかて、正義公道に於て、同等なる能力を有するとを。男女共に同等の境遇に置かれたらんには、女子は男子と等しく、勞力、憂苦に打勝つとを得ん。（セチカ）

＊　＊　＊　＊　＊

よし婦女子には、所謂短處弱點のありとするとも、其短處弱點を增加せんとて特別に企圖せられたるが如くに見ゆる教育の組織を可として、之を固守せんとするは理に戻りたる事に非ずや。

（ハツクスレー）

＊　＊　＊　＊　＊

凡作レ事須レ要レ有ニ事レ夫之心一不レ要レ有ニ示レ人之念一

（言志錄）

樊姬

樊姬は楚莊王の夫人なり。莊王位に即きて狩獵を好む。樊姬諫むれども止めざるが故に、自から禽獸の肉を食はず、王後に過を改

め政事に勤むるに至りき。王また嘗て朝政を聽きて食事を忘りしかば、夫人は何故に然るやを問ひしに、王は得意顔に、賢者と政を談ずれば饑を倦むとなしと答ふ。夫人其賢者の誰なるかを聞きて、其者は眞の賢者に非ず之を遠くべしと諫め、自から賢人孫叔敖を薦めて參與たらしめたり、これより楚國の政績著しく擧り、治三年にして、莊王天下の覇者となりき、楚國の歴史は書して曰く、莊王の覇業は樊姫の力なりと。

山名氏清の妻

山名氏清明徳の戦に武運拙く敗北して、敢なく討死を遂げたりけり、此時其妻堺に在りしが、敵陣間近ければと、從士等輿に打ち乗せ亂を避けゝるに、偶々夫の戦死を聞て悲歎やるせなく、輿の中にて自

山名氏清の妻

害し果てたり、從士等大に驚き藥を命じて百方介抱したりけり。幸ひ未だ絶斷れずして、危く王の緒を繋ぎ留めけり、時に子息なる左馬介及び七郎の兩人、戰場落ち延び母の跡慕ふて此所に來り、共々其手疵を勞はらんとせるが、母怒りて目通を許さず、局をもて兩人に言はせけるは、「人として勇なきは士にあらず、又孝なきは子にあらず」とて、父と共に討死せざるを責め、終に命終りぬ、然るに最後まで手に放さゞる物あり、人々取りて之を見るに、夫氏清が陣中より送れる手紙にて、其奥に左の歌あり

とりえずは消へぬとおもへ絆弓
ひきて歸らぬみちしばの露

彼女其傍に泣ゆる樣、

沈むともおなじく越んまてしばし

くるしき海のゆめのうき橋

夫を扶けて死出の旅路の道連せんと云ふ、心根の切なる思にも餘るべし、又自害するとあながちに貫むべき行にあらずとはいへ、武士の妻として、天晴れ雄々しき大丈夫の女性といふべし。

予は一家の父たるものが、其娘を敎育するに懶惰の經典を以てすることを非難するのみならず、又彼等を慰むべき無智無學の境に放棄することを難ず。何が故に女子は男子と同じく學問せざるか。何故に女は凡ての學科に於ける智識無きか。吾人は女子を養育して人形たらしめ、而して吾人の男兒は後年に至りて、甚だしく流行を追ひ、浪費をなすの技術を知り、而して人間を造るの道を知らざる人形と結婚するなり。嗟夫家内の美しき母は斯る敎育を受け

て成長し、其伴侶たるものは、十九世紀の文明の恩澤に浴す、此殷々として進歩する文明の大潮流中に立ちて、婦人のみたゝ愚鈍盲昧にして存在すべきに非ず。女も此活動世界に於て一大地歩を占有せざるべからず。故に婦人は未だ知らざりし所のものを學びて、今日迄の無益悖理の教育を放擲せざるべからず。

（カール、サウベストル）

芒慈母

古へ支那戰國の頃に芒慈母といひけるは、芒卯といゝるものゝ後妻なりき。先妻の子五人、わが所生の子三人あり。慈母は繼子を愛すること我子よりも厚かりしかど、繼子等は、兎角、慈母に親まざりければ、常に之を憂へたり。或時繼子の一人法を犯して、殺されんとしたるを、如何にもして援けんとし、他人が『かく恩を知らざる義子に何の心靈』と止められるとも顧みず、我身を亡きものにせん覺悟にて王に歎き訴へしかば、義心の香しさに、義子の罪を赦されたり。

それよりは、五人の義子等繼母に馴れ睦み、母はいよ〳〵恩愛を盡して彼等を教育したりといふ。

賢き妻は其夫の冠なり、辱を來らする婦は夫をして、その骨に腐あるが如くならむ。

智慧ある婦はその家をたて、愚なる婦はおのれの手をもて、之を毀つ。（以上箴言）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

家庭の天使は婦人なり　（マヂニー）

＊　＊　＊　＊

婦人を愛敬せよ。彼女よりして啻に慰を受くるのみならず、また汝の智德力を增進せしむるのインスピレーションを求めよ。……ここに彼女を以て公生涯に於ける同等者となせよ、而して汝と彼女と相頼りて輔翼を爲し、よりて以て靈魂を戰せて、最高の理想に達すべし。（同　上）

ワシントンの母

米國民の父たるワシントンは生れて十歲の時其父を喪ひ、それより母の膝下に人となりき、母は賢明にして規則正しく、子を敎ふるに法あり、而して慈愛常に其基たり。ワシントンの獨立軍を率ゐて戰ふや、其身を靜持して、愛國者の母の模範を示し、勝利の報に接しても敢て驚喜せず、人々來りて母に向つて、ワシントンの勳功を賞讃せしに、母は靜に答へて、『お世辭餘りに多し。されどヂョーヂは幼時受けたる妾が敎訓を忘れじ。如何に人より媚を呈せらるゝとも、彼は己を忘るゝとあらじ』といへり。賢母死するや、後人其墓に題して、單に、ワシントンの母メリーと意味長き短語を記せり。

小兒は何の用をも爲すまじ。然れども後には大人となるものなり

（ブラウニング）

＊　＊　＊　＊

多くの事をなすの捷法は、他なし即時に一事を爲すこと也。

（シスロ）

節儉の要道は、少々の利に意を注がんよりは、少々の費えを省くに若かず。（ペーコン）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

職業なきは決して休息にあらず、凡そ無職業の時に起る空漠たる思想ほど、人を苦しむるものはあらじ。（クーパー）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

去年まで叱つた瓜をたむけかな

武田勝頼の妻

勝頼の妻は北條氏康の女なり。勝頼運命拙く天目山に立籠りて打死せんとせし折柄、妻の許に使を遣はして、此際早く、小田原の北條

武田勝頼の妻

へ立歸り、夫に殘りて無事に生き永らふべしと勸めたるに、妻これを聞き、一旦緣につながれては、死生を共にするは夫婦の道なりとて、『黑髮のみだれたる世ぞはてしなき思ひにきゆる露の玉の緒』と詠じて勝頼に書き送りけるが間も無く敵勢おしよせ矢玉雨の如くなれば、侍女等介抱して、立のかんとしたるを、妻は定めたる上の事なれば、心靜に、今はつる身の何か矢玉を恐るべきとて、終に潔く自害して果て、勝頼と共に死時を同じくしたりといふ。

コロンバスの妻

亞米利加大陸の發見者コロンバスの妻は、フイリッパといひて、有名なる航海者の娘なりき。年若きと共に父に隨ひて遠洋航海に出でしともあり、また天成の器用にて、父の爲に航海圖を畫きたり。其コロンバスに嫁してより、父の遺せし書類を夫に與へ、また明け暮れ夫の爲に書を讀みて、共に修め、共に學び、父の航海の經驗を語りなどして、コロンバスをして、其目的の爲に大に志を勵ましし、意を固うせしむるに至りたり。かくて夫の功業の成就を見るに及ばずして死せしと雖もコロンバスが亞米利加の發見の大功業は、妻の力甚だ多しとなすべし。

第一慈悲の心ありて人を憐み、蟲獸の上までも露の情を懸け給ひおもては唯青柳の糸の風に靡くが如く、物和かにして人の心を酌みて知り、僻める心を押し直し御嗜みなさるべく候。扨又心の中は石や金よりも堅くわだなる心をむけ給ふべからず候事肝要にて候。第二、まれ人など御渡り候はん時、内に無念の事候とも聊

か其の氣色を慕ほども見せず、何となく打ち向かひ、何れも其の折りに觸れたる物語りなどして懇に取りはやし給ふべく候。さりとて年若き人の餘り睦ましげなるも外目如何あるべく、唯何となくなぞらへて兎角しのぎなきやうに愛々しく候はん事こそあらまほしく候へ。第三、召し使ふ人の疎略にて何事も思ふ樣になく候とも忍びやかによまひ言をも言ひ聞かせ給ふべく候。如何に姿麗しき兒、女房なりとも腹を立てたる顏は見にくきものにて候。しかも若き人の聲高に怒り候体淺ましく候。（烏丸光廣）

子發の母

楚將子發秦を攻むる時、兵糧盡きたるを以て、使を王に遣はして、輸送を請はしめ、其序に使者をして、母の許に立寄らしめたり、母、使者に問ふて士卒等、豆粒を食して僅に飢を凌げるに、大將子發の食膳には、豚肉あり穀類ありと聞きて心安からず。既に子發秦を破りて凱旋せしに、母は門を閉ぢて入れず。人をやりて子發に曰はすやう、昔趙王勾踐が、僅に一瓶の酒を得し時之を河上に流し、兵士と共に下流を汲んで、食を分つの意を示したるに將たるもの〻當然の事なり。然る獨り穀肉を食つて、士卒に豆粒を與ふる如き不仁の將は吾子に非ずと。子發大に其過を悔いて、漸く家に入るを得たり。

菊地寂阿の妻

菊地寂阿入道は、後醍醐帝に味方として、笠紫の探題北條英時を討たんとして軍を催せしに、味方の小貳大友俄に心を變じて、北條氏

菊地嶽阿の妻

に従ひしものから、軍勢力寡く爲に死を決して、戰場に赴くに際し、長子武重に忠義の道を説き、家に還して再擧を計らしめ、また「ふる里にとよい計の命とも知らでや人のわれを待つらん」と一首の辭世を笠じるしに書きて故里に贈り次男以下百餘騎と共に、戰死を遂げたり。其妻此辭世を見て『故里を今宵ばかりの命ぞとしりてや君が我を待つらん』と詠じ、武重に後事を遺言し、夫の跡を慕ひて自殺す。自殺して敵の辱を受けぬは當時の道徳なりき。

凡そ婦女たるものは、晝となく夜となく、其保護者たるものに服從すべし。

幼き時は其父之が保護者たり、若き時其夫之が保護者たり、老たる時は其子之が保護者たり。凡そ婦女たるものは、獨立の狀態に

適すべからざるものなり。　（最古印度法律書）

＊　＊　＊　＊

女子を教育するは、男子を教育することなり。女子の品性を高尚にするは、即ち又た男子の品性を高尚にすることなり、女子の心理の自由を擴張するは、即ち全社會の自由を擴張し安固にすることなり。蓋し國民とは、只だ一家族より出現したるものにして、其實皆な母たるものゝ子供に過ぎざるものなり。　（スマイルス）

楚野の辨女

鄭簡公の大夫、王の命により、他行の途中、路の狹き所にて一婦人の車にゆきあひたるに、双方共に避くること能はず、觸れ合ひて、大夫の車の軸折れたり。大夫大に怒りて、婦人を引きおろし、鞭をあげて擊たんとしたるに、婦人少も愕かずして、妾が車は避けんとして避くる能はざりしに、大夫の馭者は甚だ不注意に車をやらんとしたる爲にかくなりけるものを、馭者を責めずして、妾を打たんとするは大夫の行にあらずとて理を正しければ、大夫大に恥ぢて、其名を問ふに、『楚野の賤婦』とのみ答へて過ぎぬ、其理辨の正しかりしより、之を聞くものやがて辨女といひてもてはやしたり。

女は其氣さわがしく小さくして、心險しくひがみやすき者なり、其上、閨門の内にのみ明かし暮らして、其習ひ私勝ちにして、其見るところ狹し、故に、女に慈悲正眞の心やさしくなるは稀なり。されば、女人は、とりわけ、心の學問なくてはかなはぬ事なり。妻の心やさしくして、孝順慈悲正眞なれば、親子兄弟はい

ふに及ばず、一門まで和睦し其家よく齊ひ、賤しき奴婢までも、其恩澤に潤ふ、其家是れによりて福厚く、子孫も是れによりて繁昌す。是れをもて女の心一大事なることを能く辨ふべし、たとひ、其生れつきまめやかなるも、聖人より下の者は學問の功なくては、明德の仁愛さだかに明かなること能はざれば、人慾のくるしみに浮き沈み、其家、是れによりて齊はず、親子兄弟も是れによりて和睦せず、一門中悪しく、災是れによりて發り、子孫是れによりて衰微す、彼れといひ是れといひ、心の學問は一しほ次の勤むべき事なり。（中江藤樹）

イサベラ皇后

西班牙の名皇后イサベラは、夫帝アイリンプと共に彼國中興の君主として、國政の亂れたるを理め外敵を討ちて、國威を伸張せり。イサベラ賢明にして、達見あり當時凡ての人の嘲りて信ぜざりしコロンバスの說を容れて、どれに金と船と人とを給して、其大志を助け全世界一週の途に上らしめしことは、はしなく亞米利加の發見となり、コロンバスは此大陸全土を賜物として、イサベラ皇后の治下に捧呈せり。これより西班牙の領土甚だ廣大なるを致せしのみならず今日米國の一大文明國を起すの基となせり。コロンバスの功は即ち皇后の功なりといふべし。

嗚呼何人が禽獸を以て智感なきの器械と爲すや。彼等に存するの感情は感ぜざるために存する乎。彼等に備はれるの神經は、苦樂を覺らざるがために備はれるか。嗚呼彼等が尾を振り高く嘶くは

其樂しき時にして、吾等が父母同胞を見て喜ぶの樂しきに何の違ふことありや。此時に於て人之を殺し、試驗臺に張り付け、冷々として解剖し、曰く此れ人間の爲に益すと。嗚呼禽獸は何により て此の如く虐待せらるべきの義務ありや。（ヴォルテール）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

慈愛の德は二つなり。惠まるゝものこれによりて益し、惠むものゝ又これによりて益すること、即ち是れなり。（シエークスピヤ）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

與ふるは請くるよりも幸なり。（キリスト）

清少納言

少納言は、清原元輔の女なり、故に清少納言と稱せらる。一條院の皇后定子に宮仕す、宏才博學にして、和歌文章に長じ、其著枕草子は今なほ源氏物語と相並びて、國學の寶典なり。或時雪降りたる朝、皇后少納言に向い玉いて香爐峯の雪は如何と仰せられしかば、少納言直に起て簾を高く卷き上げたり。こは白樂天の詩に、遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峯雪撥簾看との句あるを思召て仰せられしを、清少納言の早速に簾を撥きたる機才には、甚だ感賞したまひしとぞ。己の學才に誇るの癖はありたれど、古今に稀れなる天才にてはありしなり。

ハンナ、モーア

ハンナ、モーアは、千七百四十五年、英國に生れたる人なり。幼より文才あり、長じて、屢は劇曲を作りしが、二十九才の時の作を以

て、ヴォルテールの賛歎を受けて、これより兩人は友としての清き交を結び、文を闘はし、學を講じて共に樂しみたり。モーアまた宗教道徳の思想に高く、之に關する著書少からず、當時になりては、戯曲家としてよりは、無乃宗教道徳上の識見ある文士として尊敬せられ好評を受けたりき。之に加ふるに又た、教育思想に富み、殊に女子教育の必要を認め之を説きたる一著あり。當時、女子の教育に關する、多くの愚説ありしを排して卓見を吐けるものなり。

むなしく北邙の露と消えぬる夕は、むつましかりし妻子去りがたかりし親子も抱へもたんといふことや侍らん。たゞ急ぎて野邊に送り薪に積みて一片の煙にたゞへては、空しく横ぎる雲計りをうらみ、朝たに行て別れし野邊を見れば、あさぢが原の秋風のみ身にしみて、僅かに名殘て見ゆるは、形もなき白骨なり。（西行法師）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

心地常ならず、たてこめて打ち臥したる折ぞ、人情世態の委曲に通じ、物のあはれも知るべし。一生涯枕を取りたることなく、無病壯健の人は、すぐれたる賢者にあらでは、少し心強き方にや落ちん。（北窓餘談）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

吾れ諸國の人民を取調ぶるに、何處に於ても、女子は常に男子よりも多く飾れり。（レッドナルド）

田穢の母

田穢齊國の宰相たる時、下吏より受けたる百金を母に遺りしに、母

は、汝宰相となりて以來三年、俸祿とても多からざるに、何ぞ此大金を有するやと問ねしかば、下吏より受けたる旨を告げたり。母之を聞きて大に怒り、凡そ士たるものは、行を潔くし身を修め僞らず、欺かず、不義非理を遠け、言行一致すべきものなり、然るに況んや一國の宰相として此心掛なく、下々より金を賄はれて之を受くるは甚だよろしからず、吾はさる不正の金を受くる能はず、また汝如き不義の子は吾子に非ずといひしかば、田稷大に慙ぢて其金を返し、罪を王に乞ひしに、王、母の賢なるを賞して、稷の罪を宥し故の如く相位に置かれたり。

紫式部

式部丞藤原爲時の女、右衛門權佐藤原宣孝の妻なり、幼にして強記なり、爲時甚だ之を愛して、常に、汝をして男子たらしめざるを憾むといひしとぞ。年長じて和漢の書記に渉り兼て朝廷の曲故に通ず後上東門院に仕へて、門院の爲に、白樂天の文集を講じたるとあり また門院の命によりて、石山寺に參籠して、源氏物語五十四帖を編みて奉る。一條天皇之を御覽じて、これよく日本紀を諳誦せるものなりとの仰ありてより、時人式部と呼びて日本紀の局と稱しき。人となり、温順にして、女德に渉り貞操の譽高かりき。

我れツウロンの都に住ふこと茲に半歳なり。全都の男子たゞ一人を除くの外は皆な其妻に支配せらるゝを見たり。而して此の一人も亦近隣の婦人に支配せられ居たり。（マダム、グランドフォルト）

＊　＊　＊　＊　＊

十九世紀に大發明多し、されど女子が其の「己れ」を發見し得たることは、即ち發明中の最大なるものなり。（ウヰラード女史）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

慈善の事について最もよく女に適する所のものは、即ち新聞雜誌の記者なり。（ウヰラード女史）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

汝婦人よ。女は平常に於て一塊の無生體なり。然れども一朝事あるに臨んでは、忽ち膨脹して彼の天使の如くなるなり。（リットン）

曹大家

漢曹大家は『漢書』の著者班固の妹なり、名を昭と云ふ。才智世にすぐれ、學識頗る博し。兄班固當時の名儒として、漢書を著し、稿完からずして死するや、昭、皇帝の命を受け、かつは兄の遺志を紹ぎて、其書を完うせり。よりて才學の譽、いよ〳〵高く、皇帝しば〳〵後宮を召して、皇后諸妃の師たらしめ、號さ〳〵大家と賜ひき。また女誡七篇を著して、世間婦女の訓戒に供しなり。たゞに才學高かりしのみならず、貞節また正しかりけり。年七十を超えて死するや皇太后は喪服を着けて、親ら哀悼の禮を盡し、且つ使者を遣はして、葬儀の事を監督せしめたりといふ。

余が確信する所の根據は之れなり。曰く、尤も安直に尤も容易に且つ尤も自然にして尚ほ適當したる所の方法を以て公共の事務を改革せんと欲せば、茲に女性に共同の勢力を興ふるに如かず。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

世界の始まりしより以來、社會を立派にするは女子の任なりき。諸君知るべし、婦女子は彼の政府といふものを除くの外は、家族にも教會にも、社會の生計にも、文學にも技藝にも悉く其力によりて改良を施したるに非ずや。然らば之をして亦其力を立法及民政の上に行はしむるに、何ぞ効なしといはん。（ビーチャー）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

南北戰爭の時に於て、婦女子諸君が盡力ありたるの功は、眞に莫大なるものなり。（米國大統領リンコルン）

マリヤ、テレサ女皇

千七百四十一年マリヤ、テレサの匈牙利國女皇の位に即くや、諸國王匈牙利の地の割讓を要求して、國步頗る艱難なりしに、テレサ賢明にして、よく群臣を敬し、下民を撫せしかば、配下の貴族をして同聲に、『我等は我王マリヤ、テレサの爲に死なん』と。云はしむるに至りき。されば、國家多事にして、屢戰爭ありしにも拘らず、遂に國内を治安に置き、良政を施したり。特に其良改革と稱すべきは、酷刑を廢止したる事と、また封建の弊習を打破して、臣下の地位を高めしとなりき。これを以て、マリヤ、テレサの名は十八世紀歐洲の賢君の一として、歴史に傳へらる。

ホーム即ち家族なるものは、人の品行を養成する最初の學校のごとき者にて、しかもあらゆる學校の中に、斯くばかり大切なるはあ

らず、元來人々が其の美德を養成するも、または非常の惡德の人となるも、必竟は皆な幼年の時其家族に於ての仕立方如何によるものなり。蓋し幼き時家族のうちにて得たる習慣は長じて人となりたる後までも、始終滅することなく、一生のうち決して消えざるものなれば、人間の人柄を造るに、家族の勢力の廣大なること、明らかに知らるべきなり。（スマイルス）

＊　＊　＊　＊

凡て獨居して樂むものは、神明に非ずんば即ち獸類ならん。

（ベーコン）

矢部正子

正子は美濃國芝原郷の人なり、十六歲にて同じ里なる大井氏に嫁ぎ

安部正子

女見ひとり儲けたれど、夫餘所に忍び妻ありて、已は秋扇の夫れならなくに、弗と忘れられしを歎ち、齢十九と云へるに『世の中は飛鳥の川ときゝしかど身のうき瀬こそかはらざりけれ』と詠じ、女見ひき連れ親里に歸りて、爾來再たび二夫に見へず、京に上りて歌詠み又は手書く業を小澤蘆庵に學び、その外茶、香、花、諸禮は更なり長刀の技に至るまで、女子の知るべき程の物修め學びて、只管に心を磨き、程經て古郷に下りたるに、以前の夫なりける人、昔のかたらい忘れ難くやありけん、言い靡かせんものをと、文などよこしたる返事に、

秋にあいて枯にしものを今さらに
なにわどろかす荻のうはかぜ

かく詠みて後は返辭もせまりき、其後母、女見らのみまかりたるを悲しみ、廿八歳と云ふに緑の黒髪拂ひ落して尼となり、法の正道辿りつゝ、眞如の月に愈々心耳を澄しけるとぞ。

およそ人の爲すところ意の如くなるを順境といふ、なすところやゝともすれば齟齬するを逆境といふ。順境は意を快くし以て人を奬りやすし、逆境は堪へがたきも久くして益あり、松栢霜雪を經ざれば堅固なること能はず、誠あるもの逆境に遇へば、理を見ることいよ〳〵明かに、學力いよ〳〵進む、誠なきもの逆境に遇へば小なれば自ら沮み大なれば、節を失ふ、故に人を觀るには、其逆境に於てこれを觀るべし。（言語錄）

* * * * * *

およそ遭ふところの患難、變故、屈辱、讒謗、悖逆の事は、皆天

の吾が才を老せしむる所以にして、砥礪切磋の地にあらざるはなし、君子當にこれに處する所以を慮るべし、いたづらに之を免れんと欲せば不可なり。（言志錄）

蔡人の妻

蔡人某の妻は、もと宋國の者なりしが、嫁して後、夫癩病に罹り、到底治すべからずなりぬ。妻の母、よりて其女を取返して、再び、他處へ嫁せしめんとせしに、諾はず、夫の不幸は乃ち妻の不幸一旦緩ありて歸ざし上は終身の契をなせしものなり。然るに夫惡疾を生じたればとて、これを見すてゝ、親里に歸り、而も亦た他人に婚嫁せんとは、不義の甚だしきものなり、如何でよくこれをなすべけんやとて、采々芣苢といへる一詩を作りて、其志を示し、母の語を聽かず、猶更に心を盡し、不幸なる夫を看護して、一世渝らざりき。

幸福なるホームに生活するものゝ爲には、一疋の蚊爾たる虫類も醜郁たる一輪の花も、消えては結ぶ泡沫も閃く空の星の影も、皆悉く益となり、樂を與ふ。人事も亦之を忽にするとなし。蓋し天然は智者の爲に多辯以て眞理の處在を宣言すればなり。其聲や無智の聾の得て聞知する所に非ず。（インテレクチュアル、オプサーバー）

* * * * * * * * * * * *

女子の裏質風采は、學藝を修め、才智を磨くの度に隨つて、其温雅優美を加へ來る。（スミス曰）

女子を教育して、男子爲に己の無學を耻づるに至らしめよ、さらば無智無學は世より其跡を絶たん。（デビー）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

女とていかにあなどる花の風（かざし）

小式部内侍

内侍は和泉守橘道貞の女母は和泉式部なり、上東門院に仕ふ。内侍天資歌才あり、年五歳の時乳母に抱かれていねたりしが、足にて衣を蹈み裂きたれば、乳母之を咎めしに、小式部は、『いつの間にたが玉章のかよひきて』といひしに乳母驚きて、其意を問ふに、『ふみさく音の懐にする』といひしとぞ傳ふ。幼少の時既に秀歌をよみしかば、人々これは和泉式部が代作するものと疑ひし程なり。かの百

人一首にも載せられ人口に膾炙せる大江山いくの〻道の歌は、即ちこの疑を晴らさん爲即坐に讀み出で〻、人を驚かしたる名歌なり。

人よ、公等は我妻が、困難憂愁の時に際して如何に余を助けしかを知らざるべし。彼女は平生温柔の質なり、されどかゝる時には非常に強く熱心となり、我の知らぬ間に我に注意を與へ、我を和らげ餓め、強くしたり。此時もし彼女なかりせば、我は尻に其困難の中に、揺け倒れたるなるべし。（ド、トクヴイル）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

大和には大丈夫澤かありと云へど
我になくてたへぬは君ひとりのみ　伊其部女

＊　＊　＊　＊　＊　＊

このまゝにすまばすむべき山水よ
浮世のちりに濁らずもがな

榮仁親王

サワフオ

サワフオとは紀元前六百十年頃、希臘國レスボスの島に住居せし一女流詩人なり。初め人に嫁して一女子を產みしが、後寡婦となりて盛に詩を作りしに、其文字といひ、其調といひ共に非凡なりより、希臘羅馬の人々に廣く傳唱せられたりといふ。其詩は主とければ、愛情の事に關したるものなりとぞ、而して其詩、今日に殘して、極めて尠し。サワフオは、實に同時代に於て男性詩人と肩比もの、毫も耻づることなかりし空前の女性詩人として、尊敬せらして、れたりといふ。其生時品行に於ては大に亂れたりと雖も、吾人は、其行の爲に、其文學を棄つべからず。

よろづ我よりかみつかたには、つゝしまねどもあやまり少なし。我より品くだりたる人の前にはあやしの言葉までも心づかひすべきものにこそ。（時子）

* * * * * *

皆人の我れにあいするときは其惡かることを見ず知らず、我れにうとき時は善事も知らず惡しき者のいよ〳〵わしかるなり。愛すれども其惡を知り、にくめども其善を知るものは人なり。ことに女の身には、高き賤き心なく色を見て枝をたわむの言葉あり、常に直き心を以て眞心なるべきこと、女のほいなるべし。

（泉式部）

女子を教育養成するには、信仰を以てし、理論を以てすべからず。

（ナポレオン）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

光明皇后

聖武天皇の后にてれはす、體貌極めて麗はしく、光り輝くばかりなりければ、光明と名けさせたまひき。稱德天皇の御生母なり。天皇と共に深く佛法に歸依し、謀りて、國分寺東大寺を造營したまふ。また施田施藥の二院を置きて、天下の餓恙を恤まれき。東大寺造營成るの後、佛告によりて、温室を建てゝ、貧賤をして浴を取らしめ親ら千人の垢を取らしめたまひ、其最後に癩者の爲に全身の濃汁を吸ひたまひしが、この癩病者は、即ち佛陀の化身にて、皇后の信仰を圖めんが爲に權現せしものと傳ふ。

常識の多きを誇るものは、必ずや常識も非常識も共に缺乏せるものなり。（バッタル）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

予は多くの女子の不滿心より肺勞に陷るもの多きを信ず。此不滿は即ち天父の響應に預るべき靈性が、豚の食ふ糟糠を以て滿足せざる爲め正當なる不平なり。（マクドナルド）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

國民の品性を高尚ならしむべき最確實の手段は、國民の母たる女子に與ふるに、進歩開明の教育を以てするに在り。（ガリバルヂー）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

御乳の人添寝ややさし枕がや　　綫戸

鄧皇后

後漢光武皇帝の皇后鄧氏は、幼少より史書に通じ、詩論に明く才識倫を超えたり。后となりて後、帝を輔佐して國政を理し、冗費を省き、賢良を擧げ。帝崩後に及んでは、太后の位に在りて。嗣主を撫して、天下に君臨し、德化を行へり、太后の時漢國多事にして、內憂外患交々至り、民心甚だ安からざりしが、后身を以て道に殉ひ臣下を撫し、百姓を恤みしかば、遂に天下小康を得て、歳また豐かなりき。后嘗て病む、左右請して、身を以て、后の命に代らんとを願ひしに、后之を聞きて、怒り、何すれぞ、さる事をかする、これ我意に悖はす、各直に過を謝して、己の福を祈るべしと勅せりとぞ。

吾が歩む路は、悉く是れ女子の導きによる。熱帶の地熱氣炎々たるか、極方の地、寒氣凜々たるか、しかも茲にもし女子あらば、即ち茲に幸福あらん。（ムーア）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

何人の腦中にも、一つの理想あらん、此の理想は公義慈悲才能及び淑者並に痛めるものに對する信切等を慕ひ求むるものなり。而して不思議なるは此の幻想一個の實躰を得て、女子といへる人間となり世に存せり。（ブラウニング）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

驕慢といへるものは物べての誤謬の根底となるものなり。其外の

私情は時として善をなすことありと雖ども、凡そ驕慢にして能く悪の源ならざることは稀れなり。（ラスキン）

上毛野形名の妻

舒明天皇九年に上毛野形名將軍となりて蝦夷を討ちて、戰不利なり味方の兵士潰え散ず。形名單身走りて壘に入り、敵の圍む所となりて、出るに途なし、よりて夜に乘じて逃れ去らんとせしに、妻大に慨きて、かくてはたゞに辱を增すばかりか、祖先代々うけつぎたる武勇の名を潰さん、これに過ぎたる耻あらじと、即ち酒を形名に侑め、其醉ひ伏するを窺ひて、親ら、夫の甲冑を撤り、婦女をして弓弦を鳴らさしめたり。形名醒起きと敵に向ひければ、敵は壘中なほ多數の兵ありと信じ、圍を解いて去る。形名即ち散卒を集め、遂に賊を征す。

人の長所を稱すれば、其短所は自ら知るべきなり。（坂本龍馬）

* * *

智識の修練に於ける女子の權利は、たゞに權利なるのみならず、また其本分なり。たゞに權利あらんか、之を犧牲に供することを得べし。然れども、其本分なるを如何にせん。（ド、オルレアン）

* * *

女子は社會に出でゝ爲すべきものなし、是れ即ち女子は、些細の事より外に何事をもなすべきものならじとすべき理由なるか。女子は男子よりし大なり危險の道に置かれたり。これ即ち女子の能力は、勉めて軟弱ならしむべきの理由なるか。女子は未來の人間

の品格を形成するものなるが故に、女子自身の品格は現今の如く
に毀損せらるべきものなるか。（シドニー、スミス）

ダイオチマ

昔アゼンスが、希臘文明の中心と稱せられし頃にも、一般に婦女の地位卑く、半ば家庭内の奴隷に等しかりしが、かゝる時代の常として、他方には、遊女の類の者多く、彼等は學才あり藝能あり、以て、多くの男子と交際を結びて身を立てたり。彼等の中に賢女多かりし話尠からず傳はれるが、特に、ダイオチマといへるは、大哲學者ソクラテスと深密なる交際をなして、常に彼を家に迎へて歡待し以て議論を闘はしたり。ソクラテスは其哲理の說に於て、このダイオチマに負ふ處、尠からず、殊に愛情の說の如きは全く、此婦人との交際談論によりて感得したるものなりとぞ。

女をして高慢ならしむるものは、即ち其美なり、女をして尊からしむるものは、即ち其德なり、又女をして神の如くあらしむるものは、即ち其程好きことなり。（シエークスピヤ）

* * * * * * * * * * * *

吾等男子には數多の情念ありと雖ども、女流には唯だ二箇の情ありといふべし。即ち娯樂を愛すること、及び權勢を愛すること是なり。（ポープ）

* * * * * * * * * * * *

天の使の如き清潔なる女子の足下には、吾等男子の粗暴なるものを謹んで平伏謙遜し、斯る高尙なる德ある人が、決して不善をなす

ことなかるべきことを敬服するものなり。（サッカレー）

法均尼

尼は和氣清麿の姉にて、俗名を廣虫といひき、孝謙帝に仕へ、帝薙髪の時、己また尼となりて奉仕す。慈善の心あつく、藤原仲麿の徒黨數百人將に斬に處せられんとするものゝ爲に、命請をなし、亂後飢饉甚だしく、民間棄兒多かりしを、人を遣して拾い上げ、八十三兒を得て悉く養子となせり。清麿の道鏡に忤ひしとにて、流罪せられし時、尼もまた備後に流されしが、後召し歸へされて、官位を高く進められ、齢七十にして卒す、法均清麿の仲、友愛の情至りて厚く、財物を分つとなかりしといふ。

怠慢は萬事を困難にし、勤勉は萬事を容易にす。朝に晩く起るものは、終日趨走して夜漸く其の事務に追付く。而して遲怠は步行の甚だ緩慢なるものなるが故に、貧困は速に之れに追ひ迫るなり。（フランクリン）

* * * * * * *

汝が門戶に賢き古語を記るせ。曰く大胆なれ大胆なれ大胆なれと又曰く然れど餘り大胆なる勿れと。然れども、凡て足らざるよりは餘れるが宜しく、及ばざるより過ぎたるが善し。（ロンゲフェロー）

* * * * * * *

凡そ人に金錢を送り、之を與ふほど有害なるはなし。其人もし獨立自營するの力あらんか、却りて之れによりて其力を失ひ、全く無用の人となるに至るべし。（ナッキ）

樂羊子の妻

河南の樂羊子遊學して業未だ成らざるに歸る。妻即ち機を斷ちて、之を諫めければ、羊子其非を覺り再遊學に勉めて、歸らざること七年其間妻家を守り、躬ら勤めて、姑を養ひ、また遠く資を羊子に饋りたりとなん。曾て盜賊あり、妻を辱めんとして先づ姑を刦せり。妻之を聞き刀を採て賊に向ひしに、賊は汝、其刀を捨てゝ我意に從はゝよし、然らずば、姑を殺さんと强迫せしかば、進退こゝに谷まり、即ち自から刀を取つて、己の頸を刎ねて死す。賊之に驚きて、姑を殺さずして去れり。太守之を聞きて、妻を葬るに厚禮を以てし、號して貞義といへり。

權貴の家と女おほき家とに數々出入すべからず。あるじ留守の家にながゐすべからず。主人欠伸せばはやく立つべし。人來りて問ふことありとも志他にわらば、詳に說くべからず。吾が好事なりとも人のこのまざることをば語るべからず。朋友にも深切の意見再三にして可かずんば止むべし。我れなすべしと思ひ立ちたることは、明日ありと思ふべからず。貧しき人は疎みやすく、富貴の人は親みたきものと知るべし。金銀にのぞみては、爭心起るものと知るべし。（椿園叢書）

* * * * * *

養生の道はたゝ自然に從ふて得たりとなす。養生に意あれば則ち養生を得ずこれを蘭花の香に譬ふ。嗅げば則ち來らず。嗅がざれば則ち來る。（佐藤一齋）

有智子内親王

内親王は、嵯峨天皇第三の皇女にておはしき。幼少なるよりして、才學の譽高くおはせしが、或時天皇、此御子の邸に行幸し給ひ、園中の花を賞美して、酒宴を開き、群臣に命じて、『春日山莊』といへる題にて、詩を賦せしめたまひしに、時、僅に十七の齡にてませし内親王は、即席に、「寂々幽莊翠樹裏、仙輿一降一地塘、樓林孤島曉春澤、隱澗寒花見日光、泉聲近報初雷響、山色高晴暮雨行、從是更知恩潤遍、生涯何以答穹蒼」と賦せられしかば、天皇大に驚かせ給ひ、直に三品の位を授けられき。

婦人よ汝等何ぞ悲哀の情を懷くや。我輩と雖とも敢て汝等を目して無精神なりと思惟するに非ず然れども予は決して理學者の如く汝等を同等と認むる能はず、妄りに男女同權の說を唱ふる汝等の思想は是れ强暴なり。何となれば、婦人は素より丈夫の所有物なるも、我輩丈夫は汝等の所有物に非ざればなり。且つ又婦人の丈夫に於けるは、猶ほ園中の果樹が其果樹の栽培主に歸するが如く然るものあればなり。（ナポレオン）

＊　＊　＊　＊

男女別に優劣する所あらず、然れども聰慧なる男女を比較するに男は女に優れる如し。こは他なし、此の如き男子は、たゞ女子の氣質に、更に男子特得の包容的寬仁の氣質を所有するが故なり。

（マダム、ギラルデオン）

コルネリア

コルネリアは羅馬の名將シピオの女にして、王妃たるを嫌ひ、平民の妻たらんとを欲し、グラッカスに嫁して、愛國正義の士グラッカス兄弟を產めり。早く寡婦となりて、二子を敎育するに全心を用ゐ彼等の爲に、自から良敎師を、擇んで之れに就かしめたり、一貴婦人一日コルネリアを訪ふて、數多の寶玉を示してさも誇り顏なりしかば、これが挨拶として、コルネリアは其の子を出して、これを示し、『これ、妾の爲に最も誇るべき寶玉なり』といひき。此心を以て其子を敎育せしが故に、二子共に其大器を成し、羅馬の主賓となれりき

高尙なる精神ある人は、野菜を煮るが如き賤しき業をなす能はず

と想像する女どもの可笑しさよ。我れ之を思ふて何度か腹をかゝへて絶倒せり。希臘の賢女ジオナマさへも、時には竈の前にてまめ〳〵しく人と語れり。蓋し天に祝されたる火を燃やし、且つ造化の如く人の心を悅ばしむる食物を調ふる少女ほど、世に貴くまた美はしきものなければなり。されば如何に高尙なる婦人と雖ども器械的の事務を執るは決して恥づべきことなるのみならず、此の事務は人間社會の大家政を理むるために女子に與へられたる天賦の本分なり。（ルデルソン）

＊　＊　＊　＊　＊

良室家（ホーム）なきところに善者あるなし。（スマイルス）

＊　＊　＊　＊　＊

しさや髮ゆひなほす朝きげん　りん

衣縫女

これは金權の女にて河内の國に住みき。十二歳の砌、父なる人に別れて、其喪に居るや、悲歎の甚しき、人々をして感動せしめたりき。年長け人の婚姻を申込むものあれども自から許さず。曾て母、衣縫を他に許嫁せしに、衣縫窃に家を出で父の墓側に住きて朝夕哀き悲めり。母も心動かされて再び婚を勧めず。其後は衣縫、母と共に亡父に孝養を盡し、また惠賀河の冬日には、人々徒渉を若しむを見て母と共に雜材を買ひて、之を橋に渡して、往來の便りに供せしとあり。かゝりしを十五年の後、事朝廷に聞え、詔ありて衣縫に位を給ひ、終身の田税を免ぜらる。

總て教と申すものは自得を貴び候事に候。一隅を擧げて三隅を反す共之れあり、憤せざれば啓せず、悱せざれば、發せず共之れあり候。強て此方よりの仕込みにては、必ず向ふへ入る事の淺きものに候。只此方よりは其緒のみを示し、向ふの樣子次第に隨て段々導き候こと、鐘の響きに應じ候如く之れ有り度候。何とやら手ゆるき事の樣に思はれ候へ共、之を教の術と申候。

子を育て候事も花樹に培するが如くなるとに候。春を待ちて苔める花を年の内より咲かせんと色々種々の手入をし、室に入れ、火にあて候へば、其花咲とは雖も。陽和の時を得し花樹に比し候へば。其色香も薄く賞玩も是なく候。（上杉鷹山）

＊　＊　＊

眠たがる人になる見にて　朝櫻園女

衛靈公夫人

衛靈公一夜其夫人と共に坐せる時、門外の車聲の、門前に至りて止み、過ぎて、また聲あるを聞き、夫人はこれを遽伯玉通行するなりといひしかば、王其故を問ふ。夫人曰く、伯玉は賢大夫なれば、公門に下るの禮を修めて、晝夜明暗の隔をなさず、これ賢者たる所以なりと。王人を遣はし其人を見せしめたれば、果して伯王なり。されど、靈公は、故意に夫人に戲れて、伯玉ならずと告げしかば、夫人は即ち脇を王に差し、大に賀して、此國に伯玉如き賢人なは他にありとすれば、これ甚だしき慶事なり、賢臣多きは國の福なり、賀せざるべからずといひけり。公其語に感じ夫人の人を見るの明あるに服して、其實を告げたり。

男子が女性を見るより女性が男子を見拔くこと多し。凡そ人を見るは交際社會にあり。而して交際場裡は男子が最も氣を許るし安心せんとして來る所にして、女子が最も用心し最も善く見られんとして來る所なり。即ち男子は凡ての武器を棄てゝ來り、女子は全身に物の具を覆ふて來る。されば、女子が此處に於て男子を見拔くこと當れり、男子が女子を見拔くこと多くは誤れり。

（マダム、アガウド）

* * * * * *

小說も歷史も男子の性狀を寫すこと甚だ微かにして女性を寫すこと少なし。男子の氣性は萬人に開帳せられ、女子の心中は深く秘せらる。（マダム、デクファンド）

＊　＊　＊　＊

縫物や着もせず活す五月雨　羽紅

福依賣

本朝古來忠孝節義の男女の數、甚だ多く、其のいみじき譽、其芳しき名おの〳〵史籍に錄されて後世の鏡となれる中に、往古よりして昔く孝子の模範として、世に聞り傳へらるゝは、福依賣なり。福依賣は薩摩の人なりしが、父母既に老いて、男子無く、而も皆病に打伏して、便いと尠かりしを、福依賣かよわき女の身として、人の爲に傭耕して以て父母を養ひ、湯藥に侍すること二十餘年一日も渝ることなかりき。事官に聞え、仁壽年中爵三位を賜ひ、村里に其孝行の次第を旌表せられたりとなん。

顏を洗ふに當り、さま〳〵の方法あり、その中に過てる洗ひ方も少なからず、今余は多くの仕方ある中に、唯一つこれぞ眞の顏を洗ふ法ともいふべきものをしるすべし。先づ盤に新鮮なる水を七分目ほどみたせ、息をこらして顏と手とを水中に沈め、全く濕ふ頃石磏をまんべんなく顏へ塗り、再び水中に顏を浸し之れを洗ひ去り、また〳〵新しき水にてよく顏を洗ふなり。石磏を用ゐること多ければ、皮膚のいたくキシミて何となく面の强張ることあり かゝる時は微温湯を以て靜かに皮膚をあたゝめ、しかるのち海綿などにて洗ふをよしとす。顏ほど外物よりの汚れを受くるところはあらじ。面は少なくとも日に三四回は必ず洗ふべきなり。これ汚物の堆積を防ぎ、皮膚の强壯と心氣の爽快とを得るためにして

決して度々顔を洗ふも、しやれるためなりなど思ふべからず。

（ウヰルソン）

モニカ

大聖僧アウガスチン、少かりし時、品行放埒なりかしば、母モニカ大に之を愛へ、己の徳を磨ぎて、子の行を規す、子遂に之に化せられて、後には百世の師表として、徳化千載に流るゝの聖賢となり、賢母モニカまた世の親の鏡とし傳へらる。されば此聖僧は常に母の徳を感謝し、嘗て其有名なる懺悔の文に記して曰く、『ア、吾が持てる、凡ての物は皆、母より得たり。オ、吾神よ、吾いま汝の子たるを得るとせば、そは汝が期る母を吾に賜ひし故による。吾が眞理を重ずるに至りしは、母の教示による。罪と不運との爲に早く吾の死せざりしは母が世の爲に久しき信實の涙を流し、之を謝し、之を償ひ玉ひしによると。

好き友を持つか否らずば全く友なくしてあれ。
決して怠る勿れ。秘密は秘密として固く保つべし。
常に眞實を話すやうにし、且つ約束を少くすべし。
人に話す時は其顔を見るべし。
不幸ありし時の外は汝の入金にて生活せよ。
榮えんことを祈らは富むために急ぐこと勿れ。
小き確かなる所得は心を安んじ滿足せしむ。
金は手に入りし後ならでは使ふべからず。
床に入りしとき一日の行爲を三省せよ。

反對し得るの勇なきに恐れて、惡に誘はるゝ勿れ。
まづ正しくして而して後ちに温厚なれ。（プライス）

赤染衛門

赤染衛門は著名の歌人なり。初め攝政道長の妻倫子に仕へ、後大江匡衡に嫁す。曾て藤原公任將に中納言の職を辭せんと欲して、當世の名儒紀齊名、大江以言に屬して辭表を作らしめたるに皆其意に愜はず。より て更に匡衡に依頼す。匡衡は齊名以言の才學を以てして猶公任の意を滿たす能はざるに、吾文もまた望に合はざらんを恐れて、頗る愛色ありければ、妻衛門告げて曰く、公任公は生來人に矜り飾るの意多し、されば其辭表には盛に門地の貴きを述べて隱に官位沈滯の意を訴ふるの意を露さば可ならんと。匡衡之に從ひ、果して

公任の心を得たり。

それ衣は寒さを防ぎ、食は饑を助くるにさへ足らば、又外に求むべからざるよし、古より申傳候。しかるを今や其女は奢侈を專にし、髪のかざり、衣までにも、金玉をつらねて、質素なるとをきらひ候。漢文帝の御寵倖を得し愼夫人、衣地を曳かず、帷帳文繡なしと申候を、古より美談にいたし候。武夫の家に生れし女は、猶更質素にして、萬づ古風を慕ふべき事と思はれ候。しかれども女の物しりがほにならはしに背くは、また見にくき物にて候。

（白川樂翁）

＊　＊　＊　＊　＊

ツマリ餘裕思慮膽力なゝ謂ても、其人の天分だよ。天分と云ふ

ものは、實に爭はれないものだよ。併し磨けば光るのだよ。ドンナ者でも平生の修養次第にあるとも、亦中々爭はれないものだよ己い等もノ、十七十八十九血氣盛の此三年の間劍術の修業をした時に、いろ〳〵禪で練つて見たかノ、おい等の修養は大層役に立つたよ。（勝海舟）

衛姫

衛姫は齊桓公の夫人なり。屢ば桓公を勸めて、身を修め行を正うふせしめ、遂に天下に覇を稱するに至らしめたり。桓公甞て衛姫の生家の衛を伐つの心ありし時夫人之を察して、身の飾を棄て、謹慎して、衛の罪を宥さんとを乞ひしに、桓公佯りて衛を伐つの意無きを云ひしに、夫人は桓公の顏色擧動に攻伐の狀あるによりて公の意を推知したりと答へしかば、桓公其達見に驚き、衛を伐つことを止めたり、翌朝宰相管仲公の顏色の和ぎたるを見て、齊衛の平和を祝したり。桓公大に喜び、『夫人内を修め、管仲外を治めば吾愚なりと雖も、以て世に立つに足れり』といひけり。

女子の智は不定輕率にして、大道理を達觀するよりも寧ろ格別の小事例に注意し、細考熟思したる判斷若くは過去の冒驗によるよりも、寧ろ直覺によりて、百事を理會々得す。然れども、其推考の神速敏捷なるや、まことに驚くべく、容易に微細の點に達し、又屈曲及び難きの邊に悟入すること早く、到底男子の企て及ぶべからざるものあり。（レッキー）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

人間の能力の正當なる方向は、之をその幼時に於て教練せざるべからず。故に人をして尤も順序正しく尤も調和宜しく發達せしめんと欲せば、教を怠りたることによりて、又は教へを過度にしたることによりて、又は教を誤まりたることによりて、未だ發達の方向を誤まらざりし以前より、先づ早く之れを正當に教練せざるべからず。（フレーベル）

つな女

昔、若狭國西津の漁師角左衛門が娘につなといへるは、小濱の松見氏に奉公して、稚子の守してゐたりしが、或日何處よりか、一疋の狼、馳せ來り跳かゝりて食はんとせり。つなは迚も逃れ難きを知り稚子を地に、伏せ己其上に重なり、身を以て覆ひ拒げり。つな狼の爲に散々に軀を喰ひ破られ、死に至りて、なほ幼兒を保護せり。後人々に助けられて、稚子の無事なりしを喜びつゝ、終に死す。國守此事を傳聞し、其忠志を感じ、厚く葬り、墓に題して、忠義者つな之墓と記して懇に跡を弔はしめたりといふ。

徳ある女の夫の心は唯妻をのみ信じて安らけし。されば浮んで雲の利達を求めず。

彼女は夫に幸を與へ彼を重ずるとわらじ、露の玉緒消ゆる迄務めがちなる手を以て毛を織り麻を紡ぎて倦みもせじ。

夜は未だ明けもなさゝるに夢を破りて夙に起き出で其日の飯を備へつゝ一日の仕事を家の奴婢に與ふるなり。

其手は延びて依るべなき憐れの民の上にあり。

其怜悧なる口を漏れ出づる言の葉は親愛の則にぞある。
家内を整へんとて氣を配れども、怠りのパンは口にだもせず。
村の離れ彼れ打ち寄る時は、彼女が夫の譽ぞいと高き。
賢き小供は起き上りて讃うるはしく母を讃美す、夫も亦妻を讃めて『徳ある娘はいと澤なり、されど卿は凡て彼等に勝れり』といふ。（ラムエル王の詩）

ジヤン、ダーク

十五世紀に英佛の間に百年に亘りし大戰爭ありしが、其末期に、佛王英兵の爲にオルレアン城に圍まれ、國將に、滅亡せんとせし時ジヤン、ダークと呼べる、年齢十八なりける無學の田舍娘忽然として、一解村より起り、天命により佛國を救ふと稱し、男裝して兵を率ゐて、大に戰ふて、英兵を破り、オルレアン城の圍を解きて、王を救ひ、國僅に亡びざるを得たり。後また、戰ふて、不幸にして英軍の虜となりしが、英軍は、ジヤン、ダークの威力に恐れ、また魔女なるべしと疑ひ、且先の敗北に復讐するが爲に遂に之をに焚殺の刑に處したり。

女は智慧淺き故に、五つの疾も起る。女は陰性なり。陰は夜にて暗らし。ゆゑに女は男に比ぶるに愚かにて、目前なる可然事をも知らず、又人の訓るべき事をも辨へず、我が夫我が子の災ともなるべきことをも知らず、科もなき人をうらみ怒り呪ひ、或は人を妬み憎みて我が身獨り立たんと思へど、人に憎まれ疎まれて、皆な現が身のあだとなる事を知らず、いとはかなく淺まし。子を育

つるにも愛に溺れて習はせ悪し。かく愚かなるが故に、何事も我身を誤りて夫に從ふべし。（女大學）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

夫は天にたとへ、女は地にたとふ。されば夫の貴き事天の高きが如し。妻たるものゝ心得あり、夫婦と思ふ故になるゝに從がひて敬まひに怠り志にも違ふぞかし。始めより終まで主君と思ひつゝしみ仕ひまつらば、過ち少なからん。（女小學）

土肥實平の妻

源頼朝兵を擧ぐるや、東國の武士競ふて其味方となれるが中に、土肥實平は、なほ心を定めかねてなほ味方に參らでありしに、其妻なる人、諫めて、東國の武士多くは、もと源氏の家來なりしも、時の勢にて平家に從ひぬれど、今源家の大將旗擧の事あり、而して頼朝公は人の上に立ちて國を治むるの器なり、まして、平家は驕を極めて、人の望を失ひ、滅亡の期既に眼前に在り、されば早く、源氏に從つて譽を得給へかしと勸めしかば、實平實にもと心付き、其子と共に、頼朝に從つて、遂に鎌倉名將の一人となれり。

婚姻の影響たる其及ぶところ當代自他の禍福のみに關はるに非ず亦子孫の禍福に關せり。蓋し婚姻はこれ次世の始めなればなり。

（ショウペンハウエル）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

嗚呼汝若し一たび試みて而して成功せずんば、更らに一度び之を試みよ。再度もし成功せずんば、則ち一百度若くは更らに一百度

試むべし。而して尙ほ成効せずんば、則ち二百回、三百回、四百回、五百回、之を試むべし。而して尙ほ成効せずんば、則ち更らに一千回又更らに一千回を試むべし。汝ぢ決して失望すること勿れ。（リチャード）

＊　＊　＊　＊　＊

確かなる思慮は働くものを幸福にす。然れども、勞せざして確なる思想を得ることなし。（ガープ夫人）

弓工の妻

晉平公嘗て弓師の名あるものに命じて、弓を造らしめたるに三年の後、やうやく成功して王に献じたり。王試みに的を射しに、穿たざりければ、大に怒りて、弓師を殺さんとしたり。弓師の妻即ち王に對面して、昔、秦穆公は、其駿馬を盜みて、肉を喰ひし者を咎めざりしのみならず却て酒を與へたり。其他賢君にはかゝる例少からず。今君には我夫が秘法秘術を盡くして造りたる弓を得ながら、己が射術の未熟なるを云はず却て罪を弓に歸して、夫を殺さんとするは不法なりとて、また公の爲に射術を講せしかば、公其言を聽き再謝せしに、此度は七的を重ねて穿ちたり。公よりて弓師を宥し、金を賜ふて之を賞せり。

男子は婦人の自有權を奪はんと欲すとも、決して得べからず、婦人は既にこの世界を主管治理する專制君主の如し。縱ひ婦人の用ふる權は、主として慈愛に基くと雖とも、其權は無限なり。

（マンスム）

一世を觀るに、純粹潔白にして一己の職分を盡す人あれども、其公衆大同の利益となり邦家の職事を行ふに至りては、家を愛する人に若かず。蓋し最も善く家を愛する人は、最も善く邦國の爲に有用の役を爲す人なればなり。　（ボルク）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

小兒成長後の行狀の善惡は全く其母に關係す。而して佛蘭西に尤も缺くる所のものは、此の善良の母なり。　（ナポレオン）

白拍子靜

源頼朝弟義經の異心あらんを疑ひ、土佐坊昌俊を京都に上せて窃に之を討たしむ。昌俊何氣無きを裝ひ、義經堀川邸に伺候す、妾靜、土佐坊の擧動を窺ひ、其異謀あるを察し、義經を諫めて戒慎せしむなほ且つ人を遣はして、昌俊の動靜を偵知せしめたり。然るに義經甚はだ意とせざりしが、深夜果たして昌俊の兵、邸を襲ふ、邸内の將士殘るもの僅かに七騎ばかり、靜心ろをしづめ、急ぎ甲冑を取りて義經に被むらしめければ、義經直ちに門を開かしめ突出、劇戰す少時にして從士等變を聞きて集まり來たり、共に討ちて昌俊を走らす、義經亡命の後、頼朝、靜を鎌倉に招きて諸將の面前に舞を舞はしめたるに今昔の變に感じて夫を思ふては『吉野山、峯の白ゆき、ふみわけて入りにし人のあとぞ戀しき』と歌ひ、夫と頼朝の仲惡しきを思ふては『しづやしづ、しづのをだまきくりかへし、昔を今になすよしもがな』と歌ければ座上の人涙をながさゞるはなかりき。

女子人の妻と爲り、家を治むるや其實既に輕からず、而して又人の母となり子を敎ふるや其任重且つ難なりといふべし。夫れ人の母たるものは先づ身体を健强に保たざるべからず。身体健强ならざれば、則ち單に之に頼る所の幼稚を能く保育するを得べからず又其性公平其質純潔ならざるべからず。若し其性公平ならざれば則其子を管理するに心服敬從せしむること能はず。それ正直は眞の本なり。子たる者は眞面目に其母を信じて一も之れに頼らざるはなし。其母もし正直ならざる時は其子豈によく信を保つことを得べけんや。母たるものは又常に意想を高くせざるべからず。意想高からざれば、何ぞよく其子をして正大に事業をなし、以て文運を進むるの偉功を立てしむるを得べけむ。女子は素と情に富

み愛淵深き者なり。然るに少時學ばず既に母となり子を育てるに力りて其愛力を利用するの法を知らず。屢々子を其淵に溺らす者あり。（稼有館）

メインテノン夫人

メインテノン夫人は佛國に生れ十七世紀時代の人なり。貴族の女にして、美貌衆に秀で、才智等を超えたり。一旦一詩人に嫁して交際社會の花たりしが、寡婦となりて後、ルイ十四世の子の敎師となり遂には王の寵倖を得たり。常に王を勸めて善政を行はしめ、また奮敎の陳腐なるを棄てゝ新敎の生命あるに改信せしめんとして、屢々王を諫めたり。而も夫人に於て殊に傳ふべきは、自から一の良好なる女學校を創設せしことなり。女學校の設けは、此時代に於て實に異

數の事なりしに、夫人の識見に富める、之を起して、益を當世に興へたるのみならず、後の女子教育進歩を利せしや亦大なり。

男は強を以て貴とし、女は弱を以て美とす。曲從より尊きはなし姑爾りといふて而して非なるも、猶ほ宜しと命に從ふべし、是非を違戻し曲直を爭分するを得ること勿れ。是れ曲從なり。

（曹大家）

＊　＊　＊　＊

女子の男子に優りて語學の才能を有せる所以は、女子の緻密なると、其温順なると、其落付きたると、自我を張ると少きとによるものなり。（ブラックウード雜誌）

＊　＊　＊　＊

社會改良の一問題として、切に考慮するに、吾人は、男女相半せる其數の小兒を一處に集めて教育するは、同數の男兒のみを教育するよりも、次の時代にて、遙に大なる功益を齎し來るべきとを疑はず。（スペクテートル雜誌）

白河の捨

すて女は、京都白河のほとりの者なりき。年久しく夫と住馴れて睦かりしに、はからずも夫の心狂ひ出して、他の女を迎へ愛を運びしかば、捨は遂にあかぬ仲を割かるゝとゝなり、既に家を出づべき折、俄に大雨降り出し、風さへ添ひてはげしかりしかば、夫は捨に今風雨はげし、しばらく待ちて、やみなん時行くべしといひければ、捨は取りあへず、

ふらばふれ、ふらずばふらずふらずとて
　　とてもかわける袖ならばとそ

と一首の歌を詠みければ、夫大に感じ、行くを止め、新婦を追ひ、再び捨と睦みて、共に二生を安らかに過せしとぞ。

戰時に於ては復た男女の別なく、各人其爲し得べき所を以て國家に酬うべし。男子は胸壁に上り銃丸を放つべし。女子は病院にあり て創病を包むべし。何故に男子をのみ限りて之を戰鬪者と稱するの理あらんや。思ふに、男子も女子も是れ均しく戰鬪者なり。即ち胸壁上に在る男子は彈丸に對する戰鬪者なり。病院にある女子は飲食の過度疾病の傳染に對する戰鬪者なり。婦人の職務は決して男子の職務に劣るに非らず、たゞ其の戰ふ所の異なるのみ。

然り而して其危險の如きは、其の孰れか大に孰れか小なる、未だ俄かに知るべからず。（シモン）

＊　＊　＊　＊　＊

妻子は人情を歎ゆるものなり。單獨の人は其金銀を擧げて、よし屢ば慈善の事業に用ゐると雖ども、しかも又一方に於ては、多く殘酷なることあり、多く頑固なることあり、多く嚴冷なることあり。（ベーコン）

晏子御者妻

晏子は齊の賢相にして、其節儉力行なる、三十年の間にたゞ一襲の狐皮の裘を用ゐ、食事に肉少く豆多かりき。晏子かつて外出せし時其御者の妻、門戸より窺ひ見しに、夫は大蓋を擁し、四疋の馬に策

ちて、頗る得意の風采ありければ、夫家に歸り來るや、妻は直に離縁を求めて曰く、晏子は宰相として、名天下に顯れたるに、甚だ謙遜なり。然るに、君は僅に御者の分として、甚だ滿足せる狀あるは、妾の喜ばざる所、これぞ去るを求むる所以なりといひしかば、御者大に耻ぢて其後、大に身を卑下して奉公したり、晏子怪みて實を知り、妻の言に感じ、御者を薦めて大夫の官に任じたり。

一休和尚道歌

月影の至らぬ里はなけれども
ながむる人の心にぞ住む
木の實をば猿に食はせて猿にまた
此身くはせてもらふ猿ひき
泣きはせで泣顔するを泣きながら
泣かぬ顔して芝居看るひと
語るなと人に語ればその人がかたるなどゝ語る世のなか

おそろしき鞍馬愛宕の天狗よりなほおそろしきさとの小天狗
横さまにはふて敷へた蟹の子に
直には〳〵とは無理の親かな
横さまに親ははへどもさながらに
蟹の子じやとは言れともなし
知らぬこと知つた顔していはしやる
な口を開くと腸見ゆ
三寸の舌で五尺のからだをばやしなひもする失なひもする
名に迷ふ人の心の愚さよ喰て知り給せおはぎ牡丹餅
世の中はくふてかせいでねて起きてさて其後は死ぬるばかりぞ

尼將軍

源頼朝伊豆の流人として、北條氏に頼るや、時政の長女政子、頼朝の常人に非ず、必ず大事を成すの人たるを知りて、自ら許して之に歸ぎしが、果して頼朝の時政等と謀り八州の武士を糾合し、兵を

關東に擧げ、弟範頼義經をして、平家を西海の藻屑と消えしめ、覇府を鎌倉に開きて、六十六國の總追捕使となりて天下に號令するに至りしは、政子内助の力頗る多かりしを考ふべし。頼朝歿後に至りてや、北條氏と共に幕府の後見として、將軍職の實權を掌握し、諸將皆畏服す。世に尼將軍と稱せられ爵二位を拜す。

女子は多情にして百事熱心に想像的なるが故に、多く理想の世界に住み、男子は冷淡にして硬固堅格なるところあり、萬事組織的なるが故に、多く實際の事に處して實事の世界に住ふものなり。之を以て又女子の智識は凡て演繹的にして、男子の智識は歸納的なり。女子は直覺的明識ありて、速かに且つ鋭く、事物を洞察し瞬時にして一觀念を認むるを得るなり。（バックル）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

余が幼時母は一つの事に就きて凡そ二十度も忍びて余に教へ給ひたり。其時父は母に向ひて言はるゝやう、能く左程に度々教へ得らるゝよな、厭かざることの仕合よと賞めらるゝに、母は曰く、若し十九度まで教へつゝ倘ほ一と度び教へざりしに由りて、悉く無効とならば、如何に殘り惜しうか候はんと。余今に至るまで此の語を記憶したり。（ウエスレー）

ルーテルの母

身一貫位より起りて、宗教改革者となりし、ルーテルの偉勳賢德は人の熟知する所なるが、この哲人を養成したるは、即ち其母なりしとを記憶せずんばあらず。ルーテルの其書簡に記して、『世に敬神の

女の心はどめでたきものはあらじ』といひしは、母の德を慕へばなり。母もと貧家の妻なれど、熱愛と篤信とに滿ちて、父の非道にルーテルを呵責する時、母は涙熱きキッスを以て其痛苦を慰めしとぞ後年ルーテルの宗教改革を唱ふるや、母は老の身を以て、朝に夕に、斷えず上天に訴へ祈りて、其子のよく大事業を成就するを得んことを求めたりといふ。

一國政治上及道德上の地位を觀察せんと欲せば、先づ女子が如何なる待遇を其の社會に於て受くるやを吟味すべし。如何なる風俗法律ありと雖ども、女子の景況を見ば、則はち萬事直に明白ならんと。（ルソレン）

* * * * * *

凡そ或る社會に於ける女子の地位の高低如何を測らんとせば、之を既婚婦に求るよりは、先づ未だ嫁せざる女子に就て考ふるをよろしとす。（マーチン）

* * * * * *

水流の源は寂寞幽僻の地より出づる如く、此の世界を動かす所の勢力も、また幽隱の所より起る。（ヘルプス）

* * * * * *

土耳其人は女子に靈魂の存在するとを承認せず。

松下禪尼

北條時賴の母にて、松下禪尼といへるは、賢母の聞えある人なりき。或時自から障子の破れを繕へる際、兄秋田義景來り見て、侍女も多

かるに、何とて、此事を手づからするやと諫めしに、禪尼いへらく
まことに然りと雖も、凡そ何物にても小破の時に注意して繕ひ置かば
大破には至らぬものなれば、かく自から之を繕ひ、時頼に示さんと
欲すればなりと。時頼の勢權職を受けて、勤儉自から持して、驕を
制して、天下の政を治め、人民の心を得たるは、實に母禪尼の教
訓の力、預りて大なりしなり。

歴史は人をして賢ならしめ、詩は才ならしめ、算數は慧ならしめ
理學は深ならしめ、道德論は沈實ならしめ、論理修辭は辯達なら
しむ。（ベーコン）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

よく撰み讀むべかりけり世の中は人惑しの書もありてふ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

ことごとく書を信ずれば則ち書なきに如かず。（孟子）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

人の品格は其讀む所の書によりて知らるゝこと恰も其交る所の友
によりて知らるゝが如し。（西諺）

（千家尊澄）

趙括の母

秦の趙孝成王を攻むる時、王、趙奢の子括をして、廉頗將軍に代り
て將たらしめしに、括の母、王に上書して、括の將たらしむべから
ざるをいへり。王怪み故を問ひしに、母答へて、彼が父趙奢は自か
ら率ずると甚だ薄く、上より賜ふ所のものは、皆悉く之を士卒に

分與し、一旦王命を受けては、家事を顧みるとなかりき。然るに括は上の賜は已に藏め、又田地を買ふの營をなす、又兵法を談ずれども、實用を知らず彼は父に肖ず、將たるの器に非ずと王を諫めしも、王可かず。括則ち兵を率ゐて秦の軍と戰ふ事、三十餘日、趙兵果して敗れ、括戰死せり。衆に於て、王はじめて、括が母の遠見に驚きしといふ。

美人が人の戀愛を蒙るは、必ずしも其顏せに非ず、即ち顏色姿容の極美なるもの、必ずしも最上の愛慕を受くるに非ず。余は曾てあざある一婦人を熱愛して殆んど狂死せんとせり。然るに、其後忽焉として此の愛情の消滅したるは、彼れが面白からぬ相貌に俄かに心附きたる故に非ずして、或る時彼れが椅子の上に突き立ちあがりて、丈伸びしながら、群集の人々を覗ひ居りたる其樣姿の如何にも女らしからぬを見たるが故なり。余は此の時より始めて本心を取り返せる人の如くになりて、是れまで制する能はざりし戀慕の情を全く棄つるを得るに至れり。以て婦女子が人の愛情をひくことの、必ずしも其顏の美はしきのみによらざるを知るべし

（バイロン）

何事も風にまかする柳かな　ばせを

楠正行の母

正行父と櫻井の驛に別かれて、河内に還れば、程なく、父は湊川に戰死し、足利其首を家に送り屆く。正行之を見て大に悲み、窃に持

佛堂に入りて自殺せんとせしを、母に見とがめられ、母は泣く〳〵汝は幼なりとも正成の子ならずや、父の汝を故郷に還らしめたるは討死の後は、生ながらへて、一族郎黨を糾合し朝敵を亡ぼして、上天皇の御心を安じ奉れとの旨にあらずや。父の遺言を早くも打忘れ、今犬死せんとは何事ぞやと戒め、我も歎きの中に、子の死を制めて、深く忠義の重きを知らしむ。豈に賢母ならずや。

女子、天性孱弱なれば、これを如何にすべきや。女子は劣し、故に之をして強壯ならしむると大に必要なり。彼等には總ての人生の基礎を營むべき本分なるに非ずや。家庭の榮枯盛衰の權を握れるものは、細大の家事に映掌する女子に非ずや。即ち隨て凡ての人間社會を動かす、の力を有するものに非ずや。かるが故に彼等は殆ど凡ての世界の善惡を支配するの感化力を有す。沈重、勤勉敬慶なる婦人は全家族の靈神にして、現世未來に渡るの福祉を降す。假令社會公共に對し、甚大の權力を有する男子とても、其補佐たるべき女子なくんば、眞正の成功を致すこと能はず。

（フニチロン）

* * * * * *

口に大牢の滋味を含みて語るも、これ眞榮養の證に非ず。智識の骸骨常に外皮を破りて露出せんとする如きは精神の強壯なるを証せず。（フード）

シャーロット、コルデー

佛國革命の時、過激改革黨のマラー權勢を得て、國政を擅にせし用

元貴族の生なる一處女あり、コルダーといふ、齢正に二十五歳、此者平素神を信ずるの念厚く、國を憂ふるの志深かりしかば、深くマラーの專横を憤慨し、國家人民の爲に一身を擲ちて、彼を殺さんと計り、熱心神の冥助を求めつゝ、パリに出でしが、マラー常に刺客を恐れて、容易に人に接せざりしも、コルダーの計略に欺かれ、かつは女子と蔑りて、浴室にて之と接見するや、コルダーが懷に、藏めし匕首の爲に其心臟を刺され、脆くも其命を殞したり。其後コルダー死刑に處せらしが、人々其志の高きに感じて之を惜みたり。

貴きとなく賤きとなく、女の何ごとも物にさしいらへして、心得たるさましたるは、必ず二心なるものなり、はづかしきことにこそなべてむかしより女ははかなきものにて、男のいろ〳〵いひつる事には、百人は百人ながら、いやしき心いで來て、ながき浮名をながす。この趣に心をつけて、骨は粉にくだき、しゝむらは泥になるとも、名を思ん女は道を守るべきことなり。人は我が好む方にあやまりありといふことを知るべし。不好方にはあやまりはなきものなり。（幸子）

＊　＊　＊　＊　＊

さて衣類もなく、おれが十三の時手作りの花染の帷子一つあるより外はなく、一つの帷子を十七の年まで着たによつて、脛が出て難儀にあつた。切めて脛のかくれるほどの帷子一つほしやと思ふた。此の樣に昔は物事不自由なことでおじやつた。（おあん物語）

瓜生保の母

延元の亂に瓜生保其四弟と共に脇屋を率じて、越前杣山城に據り、足利氏の兵と戰ふて利あらず、保等之に死す。三弟散卒を集めて城に歸れば、城中の殘兵等皆銳氣を喪へるに、保の母はけなげにも、義治の前に杯を持ち出でいひけるは、妾が子愚にして、此度の戰に敗北し、君の心を傷ましむ、されど幸に二子戰死して、其罪を贖ふに足れり、妾に於ては君の爲國の爲、千百の子を失ふとも何ぞ惜むべき。今三子なほ在るあり、再擧難きに非ずとて、酒を侑め、諸將を勞はりしかば、衆其言に感じて、再び勇氣を奮ひ起したりとなん

婦人の人に嫌忌せらるゝ要素は、其學問あるが爲に非ずして、却て無智無學なると、之に伴ふ虛飾浮華となり。女子の學問は豫想外に獲たる富をば、全天下に向ひて示さんと焦慮する俄分限者の美服の如く、之に反して男子の學問は恰も其生れ落つると共に有し其天性に織込まれたる如き狀態にて、また難有味を覺知せると淺き先祖傳來の爵位の如し。（スミス譯）

* * * * * *

何は兎も角も、吾人をして、多くの女學者を獲せしめよ、彼等は些少の智慧あるが爲に毫も其美を害すると無く、頭上の綠髮は、腦髓の發達に伴ひて光澤を損するの理なし。（バックスレー）

* * * * * *

天然は女性の爲の敎師なり、女子がこの師と通じて學ぶ所は、誇學の男子が書籍を嚙りて獲る處よりも更に多し。（ガヤエラ）

呂后

呂氏は漢高祖の后なり。高祖の未だ泗上の亭長たりし時、娶りしものなり。後高祖を助けて、天下の爭亂を平定し、漢國の基を置きたり、高祖崩ずるや、呂后は庸愚の皇帝を擁して朝に臨み、天下を制して專横なりき。また我實家の爲に私を營み、其族人を擧げて王となしき。時に賢者無きにあらざりしも、以て呂后に敵する能はず、高祖の後將に絶えなんとして、后崩じ、呂氏の族また罪わりて、誅に伏し、漢こゝに安きを得たり。呂后の專横なること如斯く、また頗る殘忍の性なりしと雖も、もとこれ英傑の資、高祖の創業は后の力に賴るもの多く、終始よく我朝鎌倉の政子尼に類す。

花木の花を賞翫すれば、日除け霜除けをして虫を取り、鳥を嚇して、撫でさすらぬばかりに、大事にはすれども、肝要の根に、土かひ肥を入るゝ道を知らねば、色香の榮えを願へども、やがて、枝葉も枯れ、花もすがれて、見事なりし一木も、いつのまにかは薪となること、根に心をつけざりしゆえなり、國用の盈虛、家產の貧富も亦然り、根を忘れて、枝葉の榮えを望み願ふ心より富を求めむと せしに、いつのまにかは貧になりゆくことなり、草木の花の榮えを願はゞ、根株に心をつくるを專要とし、國家の富を願はゞ、榮辱の實意を辨へ知るを基本とすべし。

榮はさかえと訓じて、美目なることなり、辱ははぢと訓じて、面目なきことなり、美目なることは、賢愚貴賤となく、すき好む道なり、面目なきことは、賢愚貴賤となく、嫌ひ惡む道なり、但し美目を好めども、美目の實意を知らず、辱を嫌へども、辱の實意

を知らず、故に富を失ひ貧を招く。（細井平州）

津田八彌の妻

織田信長の弟信行の侍臣に津田八彌なるもの、頗る主の寵愛を受け侍女勝を賜ふて、妻たらしめんとせり。未だ娶らずして八彌同列佐久間某の憎む所となりて殺さる。勝許嫁の夫の爲に仇を報ぜんと欲し、仇の他家に頼れるを求めて之を殺し、己れは逃れて、岡崎の德川氏によれり。某の兄主信長に依り、勝を求めて殺さんとすれども德川氏厚く保護して與へざりしかば、爲に織田德川兩家の交情破れんとする狀なりしも、家康之を厭はず、飽く迄一人の貞婦を助くるの意なりしが、勝は天下の大事吾が故に由て起らんとするを患へて自殺せり。

余は女子が議員を選擧し國の政略を左右することに就て、分け前を取るの日の甚だ近づけることを確信す。余は此等の權利より退けらるべき如何なる理由あるかを知る能はず其智識其敎育其品行等に就て言ふに、現に選擧權を有する男子に劣らざる女子、甚だ多きことは極めて明かなり。而して現今の如く政治をして、道德宗敎の方向に傾かしむる必要甚しき時代に於ては、女子が及ぼす所の感化は、最も大切なるものなり。（サウスベリー）

* * * * * * *

尋常の男子は思慮すること少なく、輕々しく評判を信じ、天性のまゝに愚直に働くなり。（ローラン夫人）

* * * * * * *

アポロの歌の後には、マーキュリの美聲も聞くに堪へず。（沙翁）

ナポレオンの母

古今の英雄ナポレオン、常に母の教訓を紀念感謝し、嘗て言ふやう。『吾母は優しき内に嚴格にて、其賞罰共に嚴重なりき。善惡共に母の監視を逃るゝことなかりき。母は無比の掛念を以て、吾を監督し、只だ一の卑しき情を起す時にても、又只だ一の男らしからぬ愛情を起す時にても、些も寛假せず、斷じて制止したまひき。而て吾年少の智性の上に宏大雄高なる事理を深く根ざさしめんが爲には、如何なる勞苦をも甘んじて取り玉へり。母は僞を惡み玉ひき。吾もしその教訓に背く時は、激怒して之を制し玉へり。母は吾過の一つをだに寛假し玉はざりき』と。那翁の猛心大志の母に負ふ所多き以て知るべし。

夫婦の間高きも低きも睦ましく候はんことこそよその聞こえも心にくうも侍らめ。譬ひ幾千代を送り給ふとも咄も主に見落されぬやうに朝夕嗜み候はん事いよ〳〵千秋萬歲を保ち給ふべく候。扨又無念の事をも、さのみ思ふべからず、只深き世の有樣をつら〳〵と見て、心をものどやかに過ごし給ひ候はゝ、行末善き事のみにてあるべく候。扨又心に掛けて習ふべきは筆の道にて候。いかなる位高き人中にてもおめずしてしとやかに書きなしたるは、いとけだかく見ゆるものにて候。上にも下女方にも無手に候へば不自由なるのみかは、其の身も賤しく成り下るものにて候。『吾れ人の用に立ちなんものは第一鳥の跡なり』と、或るふみにも見え候まゝ

常々御稽古ありたく候。殊更和歌は申すに及はず候へども、尋常にけだかく四季に應じて御よみあるべく候。男も女も萬につけて身持ち心遣ひ肝要に候。（烏丸光廣）

太政所

豊臣秀吉のなは藤吉と稱して、信長の小臣なりし時、前田利家の媒介によりて、淺野長勝の養女を娶れり。藤吉家貧困なりければ、婚を擧ぐるに當り、夫妻藁を蓆の上に布きて之に坐し、破れ瓦器にて酒を酌み交せたり。妻もとより賢明にして、藤吉が非凡の人なるを知りよく之に事へて、其志を伸るを得せしめたりき。後秀吉志を得て、位人臣を極め、自からも亦た政所と仰がるゝに至りしも身を謹みて驕らず、且屢ば秀吉を諫めて、婚姻の昔時を忘るゝ勿れと

云ひき。秀吉死して後、秀頼を輔佐して、よく諸將を撫し、關東の德川氏と和親して、豊臣氏なほ無事なるを得たりき。

忠臣は二君につかへず、烈女は二夫をへずとは、もろこし齊の王燭といふもの、國破れ君はろびける時に、敵の君より高官を與へんといひて、王燭を招きけれども從はずして自害したりし時の詞なり。忠義の臣は、二人の君に事へず、貞烈の女は、二人の夫をへて嫁せず、貞女兩夫にまみえずといふも同じ心なり。貞は、操のさだかなるをいふ、烈は志のはげしきをいふ。それ人は事なくてある時は、其心見えがたし、災難の際生死の境にこそ、善きは善く、悪しきは悪しき志共かくれなきものなれ、孔子ののたまはく、歳寒くして後に、松柏の凋むに後るゝことを知ると、春

きさし夏しげる木葉のこゝろ、いつとと見わくかたなけれど秋暮れ冬寒くなる後にぞ、松や檜の常盤の色は、木々の凋むに後るゝまで、猶ほも變らである事を知るとなり。凡そ忠臣貞女の操は、いかなる愛きふしを經ても、躍たがへじと思ひとりて、二心なきものなり。（中村幅齊）

寡孝婦

孝婦年十六歳にして人に嫁して、程もなく、夫なるもの兵に徴されて國境を戍らんが爲に行けり。行に臨み、妻に向ひ、此上は生死知るべからず、もし不幸にして、死なば、我に代りて賴邊なき老母を養ひ奥れずやと賴みて別れしが、果して、夫死して歸らず。妻は夫に代りて姑に孝養を盡し、父母その未だ子あらざるを以て、再嫁を勸むれども亡夫行く時、老母を我に托し、我は承諾したるとなれば今之に負くは、信義を欠ぐものなりとて、固く執つて聽かず、あまりに强ゆれば、自殺せんずる、狀なりしを以て、父母も後には、女の意に任せたり。孝婦よりて其姑を養ふと二十八年。事遂に官に聞え漢孝文帝これに金を賜ひ、號を孝婦と名く。

男子は勇、女子は美、男子は敢爲大膽、女子は謙讓して矜らず。男子に多とする處は其行爲にあり、女子に多とする處は其堅忍に在り。男子は外に輝き、女子は內に耀く。男子は人を說服せんとして談論し、女子は人を勸告慰諭するが爲に語る。男子の情性は剛薄なり、女子の情性は柔和温厚なり。男子は災禍を拒ぎ、女子は禍後を治す。男子は科學を有し、女子は趣味を有す。男子は判

断力を有し、女子は感情に長ず。男子は正義を重しとし、女子は慈悲を重しとす。（セイインケス）

＊　＊　＊　＊

殊に婦人に希望すべきとは、推理の力を煉磨せんとなり。若し此修養を欠がんか、偏見、感情、空想に陥り、道理は外に放擲せられ、而して男子は之を見て女性には頭腦なしといはん。（アイキン）

木村重成の妻

木村重成の妻真野氏は美色ありてまた貞順なりければ、重成深く之を愛す。大阪城陣に亡びんとするや、重成食せず頗る愁容あり、妻聴慧なれば、忽ち重成の意を知り謂て曰く、君が去年今福の一戦に關東五十万の兵を驚嘆せしめ、武士の譽之に過ぎじ、それ果し難きは死なり、死に當りて死せざれば、大辱あり、君のいまに當りて食を断ち憂色あるは如何と。重成笑て曰く、死既に近し、穀を断ち、胃中に穢物を殘さで腹中の潔白を示めさんとすればなり。妻大に欣び、なほも夫をして回顧の情なからしめじと、寢室に入りて自殺す時に年十八。

無益に才智を消耗して災害を來たさんよりは、無乃之を手巾に包みて地下に埋むるの優れるに若かず。また婦人は愛情と共に至當の尊敬を受けずして結婚せんよりは無乃結婚せざるを優れりとす或種の男子は、女子教育一般に進歩すれば結婚の數を減ずべしとの杞憂を抱くものあれど、予は思へらく、もしかゝる杞憂を以て女子教育の進歩を忌むが如き人種は、其妻を獲ると能はずして、

滅絶を來さんと、世界は敢て是が爲に大なる損耗を受けざるべし

（エヂソン）

＊　＊　＊　＊　＊

男女を擇ばず、人種の如何を問はず、何人にまれ、入り來らんとするを拒みて、智識界の門戸を閉塞するは、正義公道に反す。勿論個人の場合にて、境遇才能の情實によりて、教育の度を制限せらるゝことなれども、其外には何等の制限もあるべしと信ぜず。

（ブレーク）

ステール夫人

ステール夫人は、佛國の名相ネッケルの娘なりき。才學ありて、また英邁なりき。年少うして、文名既に世に高く、後身を政界に投じナポレオンの權勢を得るに當りて、極力彼に反對したりしかば、ナポレオンは、夫人を我味方とせんと力めしも果さず、よりて、即ち夫人の著書に絶版を命じ、また巴里市の百二十哩以外に立退を命じたり。夫人よりて、獨逸に遊びて文豪と交はり、種々の著述あり。流石の英雄ナポレオンも、この一婦人を畏るゝと甚だしく、エルバ島を逃れて再舉を圖りし時も、低頭平身、夫人の助力を求めて拒絶せられたり。夫人また親に孝に、夫に貞に、眞に女丈夫と稱すべし。

山内一豐の妻

一豐は土佐侯山内氏の祖先なり、初め織田信長に仕へて名無く家貧し。曾て良馬を賣るもの關東より來る、價貴きを以て購ふもの無し一豐また之を獲んと欲すれども金無し。愁然情を以て其妻に告ぐ。

妻即ち黄金十兩を鏡臺中より出して、一豐に與へて馬を求めしむ。一豐其金の出所を怪む。妻曰く、妾の嫁する、父此金を授けて、夫の大事に遭ひて出すべしと告げしが、夫れ貧は士の常、今日の事は大事なれば、即ち君に呈する所以なりと。一豐即ち其馬を購ひ、信長閲馬の際、大に此馬を賞美し、これより、一豐の武名やうやく顯はれ、遂に諸侯となる。

女らしきと云ふとは、之を換言すれば、愚なるとなりとの考へは世に大なる誤謬はあるまじ。女子が重大なる事務に當ればとて毫も其女らしきを失はざるべく、嗜味の範圍廣大にありたりとて優美なるとを失はざる可く、推理に心を用ゐればとて、其愛念に缺ぐる所なからん。（土曜日評論）

* * * * * * * * * * * * * * * *

雖魂は智識を得んが爲に生れたり。（スペンサー）

其心は災害を認識するに遲緩なりしも、其足は善をなさんが爲に快速なりき。彼女は純潔にして、たゝ神より來り、天國の小兒にのみ賜はれる智惠によりて賢く、其美しき青春の時代は妙なる音樂につれて、聲あどけなき小兒が歌ふ曙の歌の如く美しかりき。（ホムソン）

陶侃の母

晉陶侃初め家貧なり。母湛氏頗る賢にして、自から紡績して資給し、侃をして交を己に勝るものに結ばしめたり。侃少時潯陽縣の吏とな

り。魚梁を監督せし際、鮓を作りて母に遺りしに、母はこれ官物を私して製したるものなればとて、却けて食はず、以て清廉を敎へたり。また曾て范逵といへる人來りて宿泊せしに、折柄の大雪なりけるに、滕氏は己の尊とせる新しき薦を破りて、范逵の馬に食はし、又密に髮を切りて、隣人に賣りて以て酒肴を供へたり。范逵之を知りて、歎息し、此母に非らざれば、此子無しといひしが、後、陶侃の賢なると世に知られ、竟に功名を當時に顯したり。

女子を敎へて、彼等の心に眞理と智慧との種を蒔きて、其根を長ぜしめ、而して、彼等をして自から之を保育して、其美花を開くに至らしめんと欲するの希望を彼等の念裡に入るゝとは不可なるか。

女子の智性を嘲り倨傲の論辯をなす男子は、啻に粗野無禮なるものなるのみならず、又自個の才能の欠乏を自證するものなり。

（ウエストミンスター評論）

＊　＊　＊

男女を問はず、彼等に害を與ふるものは、青閨、半學問、虛飾、浮華等にして、決して眞に高尚なる學問には非ず。（マジョン）

細川忠興の妻

細川忠興夫人は明智光秀の女なり。初秀吉、諸侯の妻子を大阪に留きて質となせり。石田三成の德川氏と戰はんとするや、質を徙して域中に入れ、なほ諸侯皆恩愛に引かれて大阪に遺り、德川氏孤立援

無に至るべしと謀り、先づ細川邸に往きて旨を告ぐ。夫人諾せず、使三たびすれどなほ可かず。三成怒りて、兵を以て邸を圍む、夫人即ち二子を刺殺し、火を邸に放ちて自殺す。三成此勇氣に怖れ、他諸侯の妻女もまた然らば、これ諸侯を驅りて德川氏に赴かしむるものとなして其謀を止む。忠興此變を聞きて悲憤し德川氏の先鋒となりて、關原に戰ひ大に三成を破る。

至味は慊ならず、至言は文ならず、至樂は笑はず、至音は叫ばず　（淮南子）

* * * * * *

人の畏るゝところは畏れざるべからず。　（老子）

* * * * * *

十指長短なり。されど痛惜皆な相似たり。　（曾子建）

* * * * * *

婦人は貌を修飾せざれば、君父に見えず。　（漢書）

* * * * * *

忠臣は二君に仕えず、貞女は二夫を更へず。（王蠋）

* * * * * *

三度くふめしさへこわしやはらかしまゝにならぬは世の中のこと

ルイザ皇后

獨乙聯邦の今日の盛大を致せるは、賢君良相名將の功に由ると素より云を待たざれども、抑も亦た普魯西王ウィルヘルム第三世の皇后ルイザの力によると多からずんばあらず。此王の時、歐洲には大

ナポレオン、暴力を振つて、天下を蹂躙し、諸國其炎を蒙らざるは無く、普魯西の如きも、國内爲に大に疲弊を訴へしが、ルイザ皇后、王を助けて、國政を理め下民を撫愛し、慈善の行甚だ多かりき。また大教育家ペスタロヂの教育法を嘉納して、之を國内に普及せしめ、大に人民の智德を磨きたり。かく國力の休養に力めしかば後幾くも無くして、其國勝邦に主として、歐洲の强國となれり。

善を積む三年なるも、之を知るもの稀れなり。惡をなす一日なれば、天下に聞ゆ。（晉書）

＊　＊　＊

欲多ければ則ち心散じ、心散ずれば則ち志衰へ、志衰ふれば、則ち思ひ遠からず。（鬼谷子）

＊　＊　＊

一年の計は穀を種うるに如くはなく、十年の計は木を樹るに若くはなく、終身の計は人を樹るに如くはなし。（管子）

＊　＊　＊

千羊の皮は一狐の腋に如かず、千人の諾々は一士の諤々に如かざるなり。（趙良）

阿萬の方

德川家康の妾、紀伊侯頼宣の生母なり。天資賢明の婦人なりしかば頼宣の紀伊に封ぜらるゝに當りて、藩政の宜しきを得て、侯家の安泰ならんとを慮りつゝ、頼宣の爲に、良よき補佐の人もがなと心掛けしに、其時、天下の浪人にて、塙團右衛門といへる一豪傑あり、

諸藩主、其英名を慕ひ、大祿を出して抱へんとせしかども、毫も受け引かざりしを、阿萬の方は巧みに計を廻して、我化粧料五百兩の中より二百兩を割きて、團右衛門の窮乏を救ひて、彼の身を賴宜に繫ぎ、以て其補佐の賓客たらしめたり。

善きことをせんとするは最も難し。只惡しきに移るまじとだに心を附ぬること修行なれ。修行はいつまでといふ限なし。身を終るまで修行とす。わけて婦女子等は、己れが一箇の料簡を以て、身を立んことをはかりて、其親々の教ゆる手かき、物縫ふことなどをば後にして、音曲遊藝を習ひつるを捨ておくは、親兄弟の過なり。是れは人を便りとせざる育てやうにて、縫ひつむぎの道を知らざれば、女の性を失ふ。その智男より少きもの故、己れを耻ちてよろづ嗜むことを專らにせざれば、人倫にはづれたる振舞出で來るなり。されば己が發明たりとも包み隱くして、人の發明を常の鑑として、身を守るべきものなり。又親は己が慈悲の及ばざるを歎きて子の不孝なるを諭すべし。また夫は妻の不貞を歎かずして己が和の及ばざるを歎くべし。また妻は夫の不和を歎かずして己が不貞なるを歎くべし。（雲萍雜話）

趙元楷の妻

隋趙元楷の妻は學者の家に生れ、夫の父は僕射の官に居りて家富みたりき。時に隋の末世に當たり、國の内亂れ騷かりしが其の時夫妻旅に在りて賊に逢ひ、夫は僅に逃れしも妻は捕へられたり。賊の首領其美色なるを見て己が妻たらんことを求めしかば、一旦は怒つて之

を却けしも、あまりの虐待に堪へ兼ね、甘言以つて、賊を欺き、窃に賊の刀を取りて、彼等に向ひ、我決心の清きを示して、戰を挑みしかば、賊大に怒り、散々に射殺して、其屍を野に棄てたり。後ち夫、賊を求め殺して、其四肢五體を寸斷して、妻の棺前に手向けて之を祭りたりといふ。

婦人は如何にして他人の說に從ふべきかの道を知らざるべからず男子は如何にして他人の說に反對すべきかの道を知らざるべからず。（スタール夫人）

* * * * * *

優しと稱ふる情は、強き深き絨獸なる人に於ての外、決して見出さるべきものに非ず。故にまことの優しき情なるものは、多く女性に存せずして、強き男子に於て始めて見らるべきものなり。（ミユウロツク女史）

* * * * * *

若し眠を貪るときは自ら生命を短縮するに異ならず。人事多端常に日の足らざるを要ふべし。（ナポレオン）

* * * * * *

處女に於て弱かりし所は母となりて強くなるべし。（ユーゴー）

春日局

局は齋藤利三の女、稻葉正成の妻、將軍家光の乳母なり、初め秀忠長子家光を指きて職を季子忠長に讓るの意あり、局之を歎じ、窃に家康に告げて、家光の家督を定めたり、家光既に將軍となるや、局、

大奥の事を總裁し、德川氏の内政を鞏固にし權威頗る張る。後、京師に入るや、時の帝、後水尾引見して、二位の爵に叙し、名を春日局と賜ひき。病みて將に死せんとするや、將軍自から湯藥に侍するに至り、君の恩寵、世の譽れ、いと高かりき。秀忠の乳母大姥と此局とは、德川氏大奥の二賢婦人にして、其名後世に傳ふ。

能く談ずるものは種を蒔き、靜かに默するものは果實を收さむ。

（レイノルド）

＊　＊　＊

細事を好まざるものは、神の命を聽くこと能はず、彼の大事を爲さんと欲して、徒に機を待つものゝ如きは、決して何事だも爲すこと能はざるなり。（ムーデー）

＊　＊　＊

夫婦は猶ほ鋏の如し、相結んで固く離れざるのみか、時に反對の方向に行くことあらんと雖ども、他人もし其間に入れば、左右乍ち接近して之を切斷し去るなり。（シドニースミス）

＊　＊　＊

景色を愛するものに惡人なし。（ラスキン）

ペスタロヂの妻

近世教育の基を開きたる大教育家ペスタロヂは、其幼なるや賢母の薫化によりて、大器を成し、其一生は、真妻に伴はれて、大業を奏したりき。ペスタロヂは眞正の教育を世に布かんが爲に、殆ど家を忘れ、己も妻子と共に飢餓に迫りしと屢なりしも、妻アンナよく家

庭を整めて、平和に滿たしめたり。四十六年の伉儷の後、其夫に先だちて逝くや、ペスタロヂ、其遺骸に向ひ嘆じて曰く『予等二人は周圍の人々より避け嫌はれ、賤められ、貧困疾苦は予等を屈撓せしめ、乾ける麵麭を落つる涙に濕して飢を凌ぎたり』と。傳者曰くこれ數十年間ペスタロヂの家に宿りし天の使なり』と。

母の愛は、社會に於ける最も聰明なる智力にして、世界の幸福禍害文明野蠻の別は、一家婦女の勢力に關すること少なからず。凡そ母は他の教師よりもよく人情の教育を完成し得るものにして、吾人は婦女によりて德義に達するの能力を得るものなり。故に善良なる母は、一家中に德義の空氣を製し、之れを以て精神に富める人才の滋養物となすことを知れり。

極めて貧困の家と雖ども、德高く愛深ふして勤勉なる婦女あれば是れ即ち德義快樂幸福の仙鄉なり。此の如き婦女は常に男子の心をして神聖ならしめ、男子もし人生の行路難に遇ふときは、よく其のために避難所となり、男子勉强刻苦の後は、よく之れがために休息所となり、不幸のうちにも之を慰め、幸福のうちにも之を勵まし、終始男子を喜ばする力あるなり。（ウサツス）

原元辰の母

赤穗四十七義士の一人原元辰は、主君歿後、大石義雄と共に復仇の謀を謀りて、將に京部に赴かんとして、其實を秘して母に暇乞せしに、母は其志を知りて、誡むるに、武士は君に難あれば死を以て報ゆべし、君の爲には一人の老母の事など意とすまじきを諭じて元

辰の志を固うしたり。後故ありて元辰再び故郷に歸り母に見ゆるや、其夜母は忠孝は兩全を得難し、汝亡君の爲に謀りながら。なほ母を忘るゝ能はずしては、事を遂ぐる能はずして、父祖の名を汚さんとを恐ると書置して自殺したり。元辰これに感され、直に家を去りて、志を復仇に專にしたり。

女は敎令不レ出二閨門一、事在二饋食之間一と申候わけは、敎令するこども、奥の内のみにして、閾を出でず、つとめは、只食をとゝのへなどするのみにして、外事をなさゝる事にて候。しかし食をとゝのふるは、小人の婦の事にて候へども、萬の事の心得あるべく候。哲夫成レ城哲婦傾レ城懿厥哲婦爲レ梟爲レ鴟婦有二長舌一惟厲之階亂匪レ降レ自レ天生レ自二婦人一かくの如く詩經にあり候故猶更女は言ずくなくして外をいはず、女の才高く巧言なるは亂のきざしにて候はずや。紂の妲妃、幽王の褒似、吳王の西施、獻公の驪姬みな巧言令色にして、つひに國を亂し申候。牝雞無レ晨牡雞無晨惟家之索也と申候へば、かへすがへすも非なく儀なきの所を行ふべきことにて候。（白川樂翁）

* * * * *

鶯や手もと休め、めんながしもと　智月

二　難

唐の世に張孟仁張仲義とて二人の兄弟ありて、兄の妻を鄭氏といひ弟の妻は徐氏なりき。徐氏の家は富み、鄭氏の家は貧なりしが、わひよめとなりて以來は、二人の交わりは、血を分けし同胞にも優

りて睦しく、貧しきを侮らず、富めるを妬まず、共に紡ぎ、物を分ちあいて私に蔵せず、共に姑に奉じて孝養を盡したり。また一人が他出すれば、他は殘りて、其子を預りて乳養し、毫も自他の子の隔なかりき。孝行友愛の情かく美しかりしかば、遂に事時の帝に聞えて、兩女の行狀を嘉みせられその村里の門に旌表して、二難と號せられしとぞ。

男子の天稟や畏敬すべく、女子の天稟や愛好すべし。男子は雷霆の轟然落下して山河爲に震駭するの壯を語るべく、女子は薔薇一輪、妬風に砕けて、枝を辭するの優なるを語るべし、男子が焦慮する時に、女子が機敏に之に判斷を下し、男子が推考する眞理は女子之を感ず。小心翼々たる男子は將に落ち來らんとする災禍を避け、女子は現在の善を捕ふるに機敏なり。男子は活動的に不撓不屈なれど、女子は受動的に忍耐す。（ブラウニング夫人）

* * * * *

兄弟の爲に、姉妹は良好の防腐藥なり。（ヘーア）

* * * * *

吾大王のなおもほしすめがみの
つぎてたまへるわれならなくに
御名部皇女

淺岡の局

仙臺の支藩主伊達宗勝逆意あり、宗藩を押領して我有とせんとし、宗藩の臣原田甲斐等と謀りて、幼主龜千代を殺さんとして。種々悪策を廻したるに、龜千代が乳の人淺岡といへるもの、智慮あり、ま

た忠義の志に篤きを以て、主の危難に迫れるを知りて擁護の心を碎きしかば、悪人等も遂に其姦謀を遂ぐる能はず、終に計洩れて、嚴刑に處せられ、忠臣皆賞に行はれし時、淺岡は重き賞與を受けたるのみならず、其忠義の美名、永く後世に傳はれり、名高き演劇千代萩の政岡は、即ち此人の事を、つくりかへたるものなり。

君子の外聞は、義理を闕がざる是れなり、小人の外聞は、義理を闕ぐことを恥とせず、たゞ外様のやうす耳きを好めり。貧賤の中に親類あるを外聞あしと思ひて顧みざるは、我が身もとより富貴にて、いやしからぬとの外聞なるべし。君子より之を見れば仁なく義なく、これこそ外聞わしきことなり。富貴の家をば、鬼常に睨むといへるも、かやうのたのもしげなきことにて、人の怨を得ればなり、先祖の積善の餘慶にて、富貴になる事なり、親類は、皆先祖の子孫なり、貧賤のものを先づ救ふべし、取りあぐる事ならざる者ならば、常に怨ろにおとづるべし。貧賤のものは、少しの助けにても、大に益を得てよろこぶものなり。君子は外聞を思ふにあり、されども外聞是れより耳きはなし。（熊澤蕃山）

* * * * * *

一藝の士皆な語るべし。（一書）

チャーロット、ブロンテ、

ブロンテは、リットン、ヂッケンス、等と並らび稱せらるゝ、英國近代小説家の名流の一人なり。愛蘭の一牧師にの家生れ、ブラッセルの學校に學び、又暫く止りて其校の教師たりし後、本國に歸りて、筆を

小説作に試み、初めて、『教授』と題する一篇を作り、之を公にせんとしたるに、奇肆の拒む所となりて果さゞりしかば、之が爲に大に刺戟せられて、久しからずして、『ジェーン、エイア』と題する一篇をものして、世上の大評判となりき、後ち數著あり。ヂャーロット、ベルの二人の妹あり、姉妹三名、カーラー、ベル。アクトン、ベル。エリス、ベルの匿名を以て、共に文壇に名を成したりき。

夫れ婦人の美貌と男子の才力とは、之に伴ふに辨別判斷の力あるに非ずんば、却て是等を有するものに禍をなす。

（チエスターフイールド伯爵）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

思想なき家庭の生活は酒なき瓶よりも猶悪し。日常一家内の實務を辨理するに當たりて、無智の民は變化てふもの無きが故に、一律不變の中に寂莫を訴へ、果は此堪へ難き單調を破らんが爲に喧嘩爭鬪をなすに至る。夫れ眞正に幸福なるホームは智識ある人の集合より成る。（イレテレタチュアン、オブサーバー）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

母たるものに對して予が望む所のものはたゞ一、即ち思慮ある愛情なり。（ベスタロザー）

加賀千代

俳諧にて名を得たるもの多かる中に、女流にては、加賀千代尼を推して第一とすべきか。其名吟の『朝貌につるべとられてもらひ水』の如きは、三才の童兒なほ之れを知る。千代は加賀松任の人、美濃

の俳人廬元坊の弟子なり。初めて其門に入るの夜、郭公の題にて、一夜考へ通し、明方になりて、思はず『ほとゝぎす郭公とて明けにけり』の句を得て、俳道に入り、遂に其奥に入れり。名吟頗る多し二十五才にて夫に別れし時、

おきて見つ寝て見つ蚊帳の廣さかな

の吟あり、感想頗る深し。

眞正偉大なる男子は、たゞに其愛情のみならず、又其智識も、大に女性の感化を受けたるものなるや疑なし。（バックレー）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

ピーコンフィールド卿は其小説サイビルを夫人の名に捧呈して、記して曰く、

余は此書を高尚なる精神と温雅なる天賞とを以て、賞める我に同情を表し、其快き美音を以て我を勵まし、其趣味と判斷とを以て、我を導き、批評家の最も酷なる人、されど細君中の最も完全なる妻となりたる、我夫人に呈す。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

家を興し、天下を興さんとき、此れが基たるべきものは慈愛の情なり。（家康）

則天武后

則天武后は初め唐太宗の官女にして、後に高宗の后なり。性明敏文史に渉獵し、帝と共に、政治を觀き。帝崩後天下の實權を握り、後遂に己に逆ふものを討ち大に唐の宗室を殺して、唐の天下を奪ひ、

自ら皇帝と稱して、國を周と號しき。年老いて猶内行正からず、また酷薄下に臨みたりと雖も、權謀術數ありて、善く人を擧げ用ゐ、賢人もこれが用をなすを樂しみたり。されば武氏の朝廷には、將相多く其人を得て、中にも賢相狄仁傑の如きは、最も信重せられたり仁傑、武氏を諫めて、後再び唐の社稷を完うするを得たり。武氏天下に君たること十六年、崩ずる時八十二歳。

自分幼少の節、亂舞の事さして好まざる事故、出精も薄く候ひしに、大殿樣御好遊され候事故、附々も督責せしめ候を、自分幼少より添附候やすといへる婦人、今は廣瀨と申者に候、此者自分とひとつになり、經政の謠本を自から書き寫し、終に一番覺えて自分に亂舞を進め候事是あり候、其品は兎に角敎の術をば得たる儀婦人の志にはやさしき事と、今に感じ居候。

性質と申すものは、迚も取替難き事に候、才を達し德を成すと申す事も、皆其性來の持前を學術の力にて生育致候事に候、惡き性質のものも、皆よく學び候上は、其惡き事は自から知り得るとに候へば、强て性質の論には及ばざる事に候。去りながら敎導の日には其性如何と云ふを知り得候はねば、敎の道を失ふ事に候。

（上杉鷹山）

成田氏の母

尾張藩の家老成瀨家の臣に成田某といへる者の母は、早く夫を喪ひて、後は、只姑に孝養を盡し、また其子を敎育するに宜しきを得たりき。特に家の跡目相續者たる長子を敎育するに、甚だ嚴に、文武

の道は共に良師を撰びて學ばしめ、苟且にも歌舞のたはれたるを聞かしめず。然るに婦人、性、雷を恐るゝと一方ならざりしが、吾子の其法に習ふ事を恐れ、自ら勵まし、雷鳴する毎に、端坐、襟を正して、恐怖の態を示さゞりしとぞ。かゝりしかば、子もよく母の教に從かひて、奮勵奉公せしかば、後頻りに俸祿を加へられ、遂に三百石より進められて八百石を受くるの顯職に上りき。

日本國は和國とて、女のをさめ侍るべき國なり、天照太神も女体にてわたらせ玉ふうへ、神功皇后と申し侍りしは、八幡大菩薩の御母にわたらせ玉ひしぞかし、新羅百濟を攻めなびかして、此豐葦原の國を與し給まひき。近くは鎌倉の右大將の北の方尼二位殿は、二代將軍の母にて、大將の後はひとへに鎌倉を管領せられはいみじく成敗ありしかば、承久の亂の時も此二位殿の仰せとてこそ、義時もろ〳〵の大名に下知せられしが、されば女とて、あなどり申すべきにあらず、昔は女躰の帝の、かしこく渡らせ玉ふのみぞ多く侍りしが、今も賢にかしこからん人のあらんには、世をまつりごち玉ふべきなり。（一條兼良）

* * * * * *

くれないの濃染の梅を見ても知れ
色あるものは實はなかりけり　　古歌

阿都麻

又の名を袈娄と云ふ、其母奥州の衣川に住ひたるに因みて、衣川と稱へけるに、其女見なればとてかくは名づけしとぞ、容顏美麗なる

に加へて心操いとまめやかなるが、迎へられて源渡が妻となりぬ、爰に衣川の甥に遠藤武者盛遠といふ者あり、一日ゆくりなく姿を垣間見て深き懇に落ちしが、衣川の女兒にして渡が妻なる由聞くに及び、速に衣川の許尋ね行き、言語もなく矢庭に伯母を捉へて腰刀胸に當て、さて云ひける樣、「己れ袈裟を見て懇しさの餘り、心地死ぬべからんとす、されば速に彼女呼び戻して己に得させよ、然らずば卿を害ひ己れも亦死ぬべけれ」と聞えしかば、衣川恐怖の餘り容易く諾い、直に病にかゝりし由僞の文を袈裟が許に贈るに取る物も取り敢へず打ち驚きて來りければ、母泣々盛遠が事を物語る、袈裟聞に淺ましくて兎角思ふに、孝ならんとすれば是れ不義なり、不義ならじとすれば是れ不孝なり、暫て心を決めて盛遠に對ひて言やう、「御身が言の葉眞實ならば、吾夫渡を害ひたまへ、爾せば心よく從ひなん」と欺き聞えしに、盛遠いたく打ち喜びて其夜の手筈を課し合ひぬ、さて袈裟は夫を說て己が閨裡に寢しめ、己は渡が臥房に寢てありしに、盛遠約を違へずして渡が家に忍び入り、臥房に至りて搜り見るに、豫て言ひ合したる通り俗みせると覺しく、髮の濡たるもの臥し居ければ、此れこそ目指す渡なれと、腰刀拔き放ち首かき切て歸りぬ、夜明けて後渡が妻仇の爲に害せられしと聞き愕然として昨夜討取りし首を見るに、渡よと思ひきや袈裟にてありければ、熟〻貞操の切なるに感じて、己が心の非義なるを悔、直に渡の許に行きて始終の事を物語り、我を害して妻の仇を報へと聞えしに、渡は之を否て「吾が妻は足下に殺されんとの望を果したるものなれば、いかで仇とやいはん、我は只だ妻の菩提を弔はんのみ」と忽ち出家したりしかば、盛遠いよ〳〵感激して己も亦髻を切り、

圓頂染衣婦阿彌陀と法號して、節婦が後世を吊ひけり。

ヂヨーヂ、エリオット

ヂヨーヂ、エリオットとは、其處女の時の名をメリー、エヴアンスといひ、嫁して後にはクロス夫人といひたる英國近世の閨秀文學者の異名なり。女史は小説を著す毎に、この男らしき異名を以て公にせしかば、世は、其異名を知りて、其本名を云はざるに至れり。ヂヨーヂ、エリオットは、才藻頗る廣く、女性の鋭き眼光を以て人情の至微を穿ち、これを花の如く、また玉の如き文字に寫して、多くの小説となし、以て堂々として、ヂツケンス及びリツトン其他の大小説家を凌駕するの勢あり。其小説は、實に近世の英國文學者の大なる賜なりといふべし。

社會全体の强固健全は、一個体の强健なるに基く。家族は即ちこの一個体にして、而して家族の要樞は婚姻の制度如何によりて動く、故に婚姻の制度整ひ、其の習慣正しき時は、社會之が爲めに健全なり。苟も然らず此制度破れて夫婦婚姻の關係不正なるときは、其國民は決して人類の當に到着すべき運命に到着すること能はざるものなり。（ケラツドストーン）

＊　＊　＊　＊　＊

夫れ道德の律法は一個人の性質の上に印刻さるゝのみならず又一國民の上に印刻せらる。國民にして若し此の律法を忽諸にせば、窮極罰を逃るゝところなし。其罰の來るや或は多年を要することあり、時あつてか彼等の一生間に來らざるともあらん、然れども

必ず來るものにして、決して免るゝところなし。（ブライト）

瀧鶴臺の妻

瀧鶴臺の妻は顏色頗る醜態なりしかば、初め誰ありて娶るものなかりしに、姿こそ醜けれ、志は甚だ高く、自から當時の名儒瀧鶴臺の妻たらんことを願ひき。鶴臺之れを聞て、遂に娶る。素より賢女なれば、事々夫を助すけて、內助の功を完うせり。己の德を研かんが爲に、白糸赤糸の團を袖中に嵌めて、善意なれば白糸を結び、惡念きざせば赤糸を結び、以て奮勵せり。また其識見甚だ高く、夫客と談論することあれば、耳を塀外に聳てゝ、之を聞き、政治談の如きは、即ち諫めて之を止め、夫として過なからしめんことを務めたりと

滿足するものは幸福なり。

早起するものは餌を獲ること多し。

屢々打てば、樫の木も倒る。

最も美味なる菓實は、熟すると最も遲し。

早く火となれば、早く灰となる。

惡友と交るは寧ろ友なきにしかず。

因循は時の賊なり。

恩は猶ほ負債の如し、返却せざるべからず。

同じ風のみ常に吹かず。

船長二人あれば船を沈ましむ。

明友を失ふの法は之に金を貸すにあり。

楊氏烈婦

唐李侃項城令たりし時、李希烈の叛亂に遭ひしが、城小に兵衆寡く到底敵し難きを以て、逃れ去らんとせしに、妻楊氏、之を諫めて、君若し逃れなば、誰か代りて守らんや、若し上下心を一にし、死力を盡して拒がば守り難きに非らじと勸むるまゝに、李侃は勇士數百人を募りて死守を約し、城に籠りて大敵に當り、楊氏は自から炊ぎて、兵士に食はしめ、彼等を勞ひまた勵ましたり。侃流矢に中りて還るや妻叱責して、君在らずんば、誰か此城を固守せんや、野に屍を曝さんは、牀上に死するに勝れりと勵ましたるより、侃再び出で、奮戰せしが、會々賊將矢疵を蒙り其兵圍を解きたるを以て、縣地

遂に安全なるを得たり。

人は樣々の事を想ひ、其頭の中、心の周りに數多の美はしき理想を漂はすこと賊に面白き限りなり。されど、之を寫して畫となすか刻みて像となすか、作りて詩歌文章となされば、人を益することなし。故に物の成効は考ふるに非ずして働らくにあり、妄想するに非ずして爲すにあり。（バーチット夫人）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

余は極めて保守を好むものなり。たゞ止むを得ずして改革を主張す。（ブライト）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

汝大ならんことを欲するか、然らば先づ小事に忠なれ、汝雄壯